

42413

教科書文庫

4
8/0
42-1934
81309 49268

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

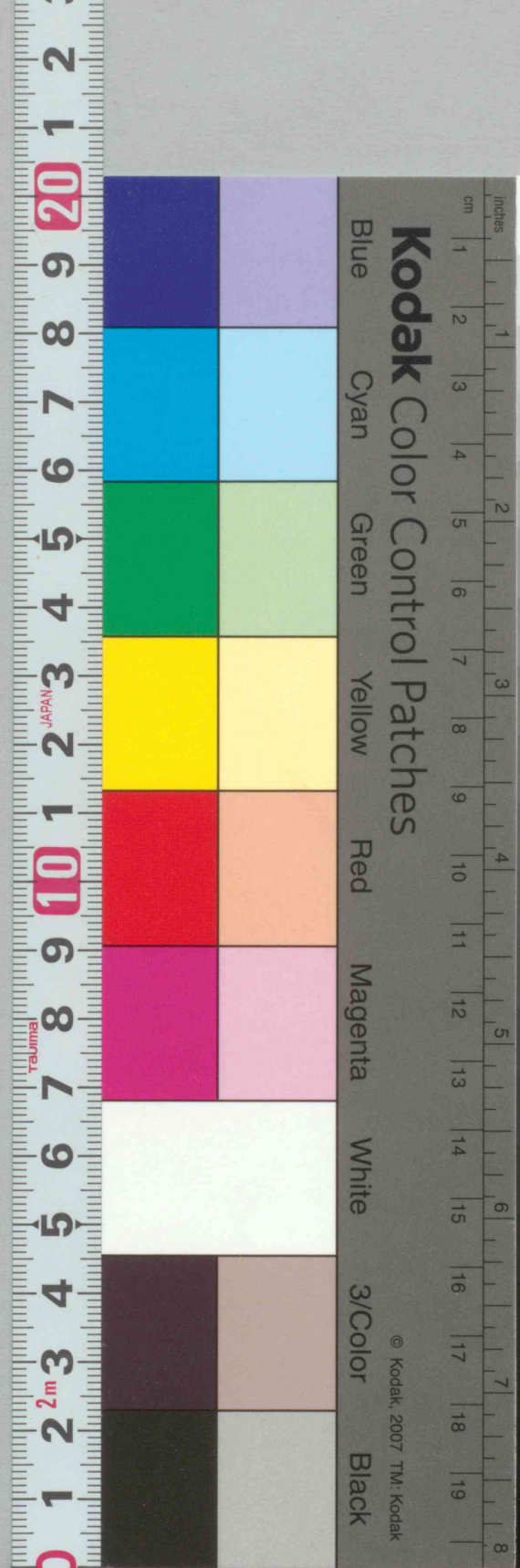


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

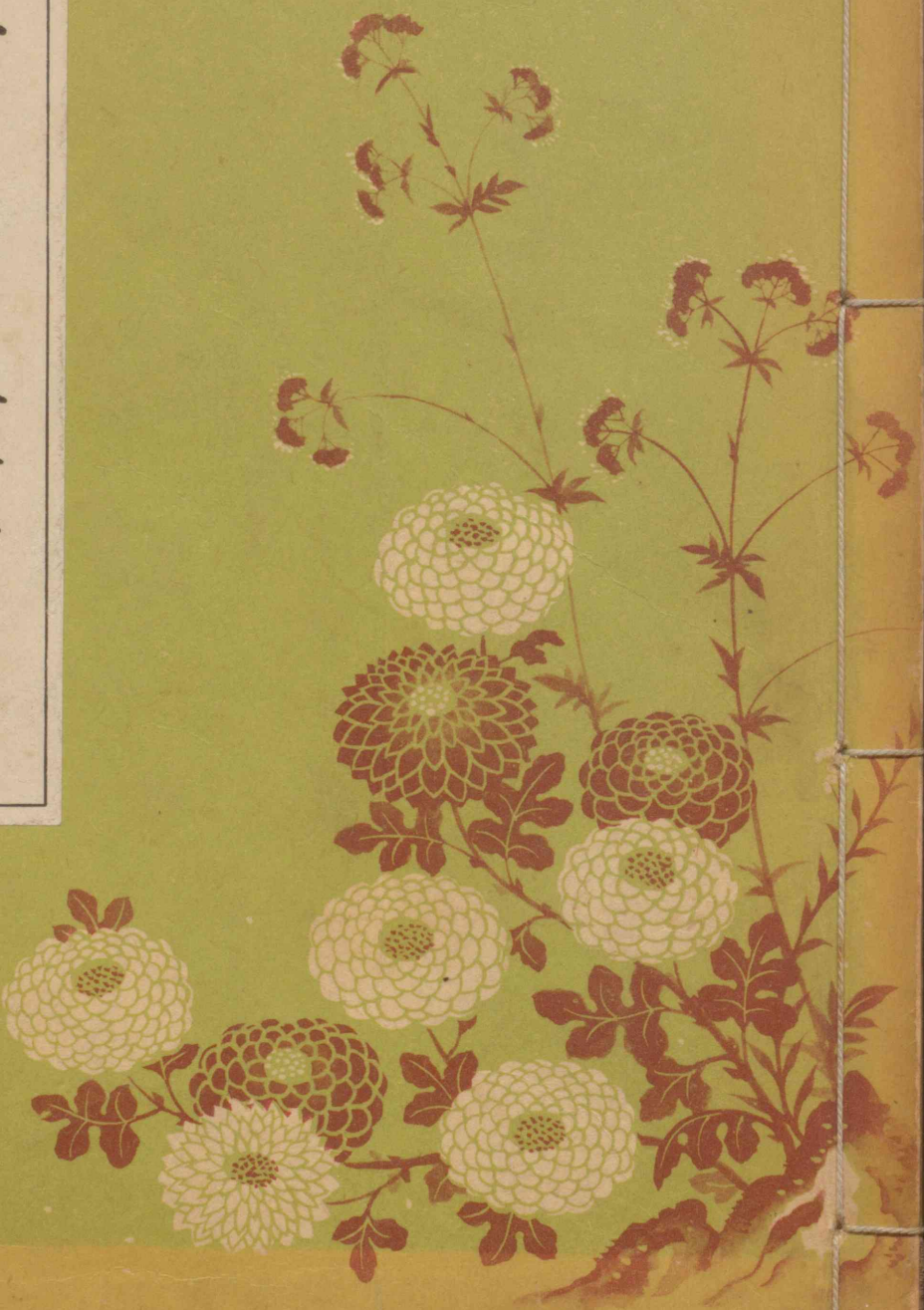
© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ka14
資料室

昭代女子國文

五ヶ年用 卷十



資料室

375.9
Kalk

中央図書館

女子服飾變遷圖



文部省檢定

昭和九年三月五日 高等女子學校國語教科用

金子彦二郎編
昭代女子國文
卷十

東京 光風館藏版

広島大学図書

0130449268





昭代女子國文卷十

目次

一	かすかなる感じ……………	奥田正造 一
二	歩む人詩……………	川路柳虹 二
三	生命と科學……………	永井 潛 六
四	自然詩人……………	土居光知 三
五	花月草紙のふしぐ……………	松平定信 三
六	琴後の餘韻……………	村田春海 四
七	月の前……………	上田秋成 五
八	百魚譜……………	横井也有 三

目次

一

九 幻住庵の記……………松尾芭蕉 七〇

一〇 重盛父を諫む……………〔平家物語〕 七

一一 光頼卿の參内……………〔平治物語〕 八

一二 今様と朗詠〔韻文〕…………… 九

一三 土佐日記……………紀貫之 九

一四 かぐや姫……………〔竹取物語〕 一〇

一五 萬葉集の歌〔和歌〕……………〔萬葉集〕 一一

一六 民謡の話……………島木赤彦 一五

一七 上代文學……………〔新體國文學史要〕 一五

一八 木に縁つて魚を求む……………〔孟子〕 一三

一九 出師の表……………諸葛孔明 一七

二〇 心の力……………小林一郎 一四

二一 生活の中心……………阿部次郎 一四

二二 春は 酣詩……………葛原しげる 一四

二三 祖宗の宏謨……………徳富蘇峰 一五

目次 終



昭代女子國文 卷十

奥田正造

教育家

成蹊高等女學校長

岐阜縣の人

利休

千宗易

茶道の達人

信長及び秀吉に仕へた

一 かすかなる感じ

奥田正造

茶道の精神を簡單につくす言葉は、和敬清寂の四字である。しかして、茶は精行儉徳の人によろし。と言つた利休の精行儉徳といふ語こそは、丁度また和敬清寂の四字を姿に現はした様な心地がする。
和敬清寂といひ、精行儉徳といふ、この心身を練る第一歩は感受性を鋭敏ならしめるにある。その爲には、特に或境地を作つて、そこへ引入れ、それにひたらせ、それを味はしめねばならない。

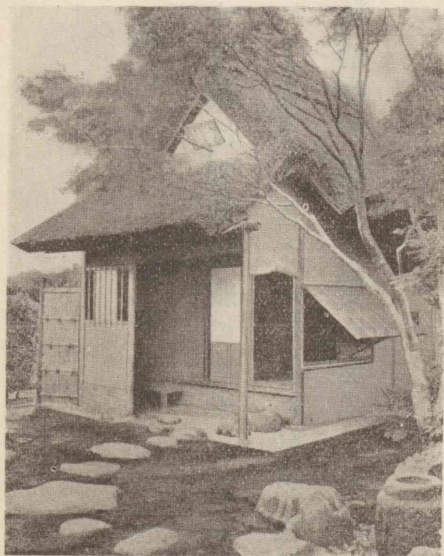
一 かすかなる感じ

一

珠光
茶道の祖
利休もこの流を汲む
義政時代の人

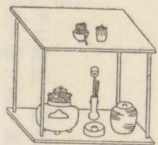
紹鷗
有名な茶人
利休の師匠
本名は武野仲村
弘治元年(三三)歿
年五十三

これが心の教育であり茶道の修練である。その謂はゆる或境地とは、いふまでもなく茶室の事である。細かい所まで能く氣づかしめる事の出来るのは、大きい廣い散漫な部屋ではいけない。起ち居振舞のため、動く風すら感じる様な小室でなければならぬ。珠光は在來の大きな室を縮めて、始めて四疊半を作つた。心を練るといふ事に氣づく時、尤もなことであつたと思ふ。紹鷗はこの古規に則つて四疊半を作り、更に室内の趣を簡略にして、これを草の座敷と稱した。利休は師の紹鷗



茶室 湛谷 神
浩宗 舟
庵作

臺子



六根
佛教の語
生死流轉の惑ひを生ずる六つの器官

と相談して、更にこれを二疊半に縮小した。これ一面には華麗な書院式の裝飾を適用する餘地のないやう、知足安分の生活を可能ならしめるやうに工夫したのであらうが、心を練るといふ他面から考へても斯くせねばならなかつたのである。「茶は臺子を根本とすることなれども、心のゆくのは小座敷である。」と利休が言つてゐるのは、實に尤もなことである。又、茶室を普通北向きとし、南の光線を避けて幾らか薄暗い室とするのも、この靜の境地を作らんがためである。かゝる工夫によつて作り上げられた室内で心を練るに當つて、最も都合よく、又最も重い役目をなすものは、かすかなる感じである。靜かな境地に、眼・耳・鼻・舌・身・意六根の微妙な活動が營まれる時、心の世界の未だ嘗て開かれなかつた部分の門が開かれる。その中でも

一 かすかなる感じ

耳の力が最も強い。主人は客の一舉一動から出る音に心の耳をすまし、客は主人の働きから出る音に心の耳を洗ふ。さればお茶には種々の響がある。來着の旨を報ずる板の音は、客が主人の心に響かす第一の響である。これを聞いた主人が出迎へるに方つて、手水鉢の水を改めんとて、さつと移す水の音は、馳走の最初の響である。露地の飛石を渡れば下駄の響がする。南坊録に、露地の出入に下駄はくこと、紹鷗以來の定めなり。草木の露深き所を往來する故、此の如し。樂に杳の音功者不功者をき、知る。といひ、又、かしがましくなきやうに、又さし足するやうにもなく、穩かに無心なるが功者と知るべし。得道の人ならては批判し難し。と言うてゐる。かうなると、下駄の音も中々むづかしくなる。併しこれも亦照顧脚下の一つで、足元に心を置く

良習も自から養はれる。つくばひで手水を使ふ音の清々しさと、手を洗ひ終つて立上る時に出る下駄の音とは、次客への合圖となるので、只單に主人へ響かせるだけではない。席入りの爲に戸の音がする。疊ざはりの音はその人の品位を偲ばせ、更に客自身の心をも落ち着かせる。客一同が入席し終るまで、その動作から出る響が續いて主人の心に通ふので、若し水屋に端坐してこれを聞けば、壁を隔てて客の一姿一態を心に見るのみでなく、その響から客の心持までも察する事が出来る。又、主人が手前の間に工夫して出す種々の響は、皆自然を偲ばせて、かすかな音に深い意味を添へて居る。即ち茶碗に汲み入れる水の音を、笕の音に通はせ、茶筌に谷川のせゝらぎを偲ばせ、賤山がつの斧の音をひゝかす等、山里の趣を取集めて、靜境に幽趣を添へる。

水屋

茶席に附屬し、點茶用器具を備へ置く所

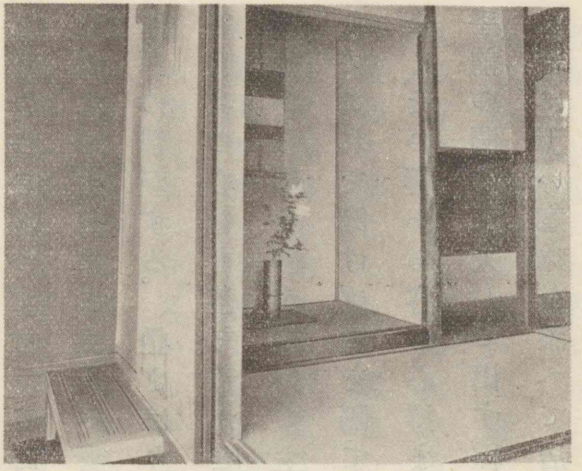
笕

地上に架けて水を通ずる樋

茶筌

抹茶を湯にたてるに用ひる筌（さゝら）。三寸許の竹筒の半以上をごく細い穂に作つたもの

これらの響の背景として終始一貫するものは、釜の湯の煮える音である。通常これを松風といつてゐる。此の松風は樂音と違ひ、旋律の影響を受けてゐないので、靜寂の興趣を一層深くさせ、落ち着いて聽いてゐると、心を大森林の奥、大幽谷の底まで持つて行つてしまふやうな心持がする。太古の如き靜けさの内に、その幽趣を増すものは松韻と谿聲とである。これを四疊半裡に移して、此の趣を偲ばせるのは、實に茶境



湛 浩 庵 内 部

の力である。

其の音聲を觀じて
(法華經普門品)

觀音

菩薩の一
慈悲の大徳を行ひ、
世人のこの名稱を稱
する音聲を觀じて皆
これを解脱せしめる

突堂和尚

名は梅崖
禪僧

曹洞宗管長
明治十二年(二五元)寂

禪定

佛教の語
寂靜三昧に心をすま
すこと

沙彌

(梵語)
惡を息め善を行
ふ義であるが、
こゝでは「修行
の未だ熟せない
初心の僧」の意

sramanera

かく心耳を澄まし來れば、かすかな感じは、單にかすかな感じのみではなくなつて來る。そのかすかな感じの彼方に續く大きな重い意義の世界が開かれて來る。經に、其の音聲を觀じて皆解脱することを得。といふ謂はゆる觀音の妙境とは即ちこれである。

一日、突堂和尚は殷々と響く曉鐘に心耳を澄まし、禪定から起つて侍僧を召し、鐘撞く者の誰なるかを見せしめた。侍僧は、それは新參の一小沙彌である旨を返り報じた。そこで突堂和尚は、これを膝下に招いて、今曉の鐘は如何なる心持で打つたか。と尋ねられた。沙彌は、別にこれといふ心持もなく、只鐘を撞いた許りであります。と答へたので、いや、さうではあるまい、何か心に思つてゐたであらう。鐘つかばかくこそ。誠に貴い響であつた

一かすかなる感じ

ぞ。と言はれて、別にこれといふ心得もありませんが、只、國許の師匠が、鐘撞かば鐘を佛と心得て、それに添ふだけの心の慎しみを忘れてはならぬ。と常に戒められたことを思ひ浮べて、鐘を佛と敬ひ、禮拜しつゝ、撞いた許りであります。と答へた。奕堂和尚はしみじみとその心掛を賞し、終生萬事に處して今朝の心を忘るなよ。と、戒められた。この小沙彌こそは後年の森田悟由大禪師であつた。朝毎に夕毎に慣れて撞く鐘の一韻にさへ、かほどまで敬虔の念ひを罩めた古人の心づかひは、如何にいみじきものではないか。

既に音によつて心が澄渡つて來ると、心の窓である眼には眞の趣が映る。曉の露地では幽かな殘燈が心を照らす。殘燈の趣は露地に配合されたその光の具合であつて、油皿の置き方や、油

森田悟由大禪師
大休と號す
曹洞宗管長
大正四年(二五七)東京
芝青松寺に寂す
年八十二

の残り加減ではない。秀吉が曉の會に招かれて露地に入つた時、侍臣を顧みて、あの殘燈はいかに。といつた。侍臣は燈火か、げよといふ意と誤つて、火の加減を變へた。これを見た秀吉は、「はや、殘燈の趣失せにけり。」と嗟歎した。悲しいかな、侍臣の心の眼が暗かつたのである。

點茶の間、主人の姿に變化があると心づき、又手前に序破急の呼吸がある、と氣がつくまでに心眼が聞けて來ると、心をこめた主人の飾り方、即ちこれに含ませられた意義を殘る隅なく己が心の鏡に映すことが出来るやうになり、また一物一體の自からなる位置にも心づき、受取つた物は出されたやうに返し、拜見の爲取上げた物は再び元の通りに置く事が知らず識らずの間に出來るやうになつて來る。又主客對すべき定座に、主位を奪ひ、通

雪降れば
(古今集紀貫之)

ひ口を塞いで、慇懃の尾籠を敢てすることもなくなる。
絲櫻の盛りに咲ける木の下に、花入を置いて眺めた秀吉の心を
汲みちがへて、其の花を切つてその感興を破つた侍臣何某の働
きを、あはれに思ふと共に、雪の朝、紹鷗が床に花入ばかりを置い
たのを見て、雪降れば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ
咲きける。といふ古歌を思ひ合せて、げにこの花に對しては、生け
るべき餘の花もないわけだ。と、感じた客の心を察することも出
來れば、利休が大晦日に枯れ薄を刈つて春を待つ心を表はし、雪
の日に紅梅を生けて、深雪の裡に一枝開く。の趣を偲ばせたなど
に、言ひ知らぬ味を味ふ心持にもなれる。
以上視聽の外、鼻に香、舌に味と、それ〴〵六根の修練が加はつて
くる。かくして養成された理智は、單に茶味の上で必要なばか

りでなく、廣く人生を潤澤ならしめる所以である。(茶味)

二 歩む人 川路柳虹

川路柳虹

名は誠
詩人 畫家
美術批評家
東京の人
明治二十一年(二五八)
生

ロダン
フランスの彫
刻家
Auguste Rodin
(1840—1917)

歩む人の強健な
体か

歩む人は往く、大地を、
歩む人はすすむ、日も夜も……
歩む人には過去なく
歩む人には踏み行く路のみ
ただ一つの所與である。
みよ、強健なその肩を、
高原のやうに豊かに
押下げられた肉は肩で高まり
鋼鐵の梁のやうに兩膊に向ふ、

歩む人の足は力

Centaur
サントウル
希臘神話にある
腰から上は人間
で下方は馬の怪
物

Achilles'tendon
アヒレスの腱
人體中最大最長
の腱腓腸筋の下
端を跟骨に附着
して居る。足首
の運動を司り歩
行飛躍などをな
させる

それは偉大な古代の建築が
地から聳え立つてゐるやうだ。
さらに……
踏みしめた足の力は
サントウルの腰のやうに
限りない固さと弾力とで
地上を目がけて彎曲する。
鐵よりも固い一つの力が
その筋肉の中を貫く。
鋼よりも堅固な意志が
腹を貫通して蹠^{あしうら}にきてゐる。
アヒレスの腱は閉め切つた鍵のやうに

ゴール

Gaul
イタリヤの北部
及びフランス・
ベルギー・オラ
ンダ・ドイツの
一部をも含む
古代の北方の國
又その國人、又
フランス人もも
こぶ

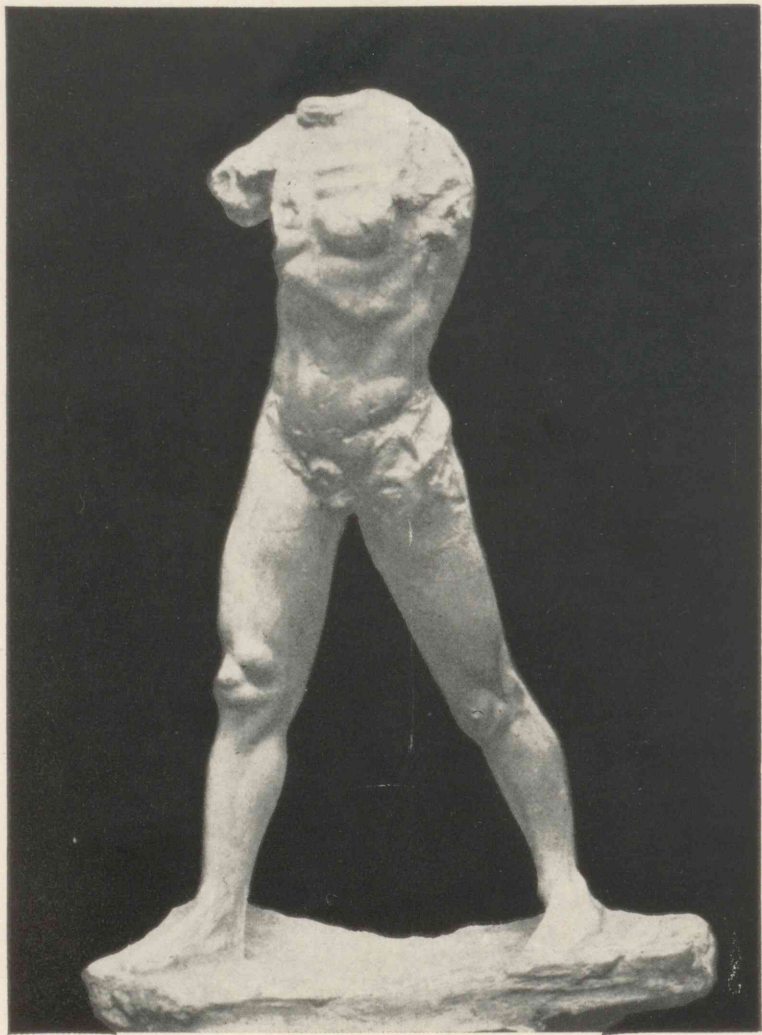
Gaul

見えない歩む人の
想像

力をこめた一點に集中する。
この偉大な建築は地から生えて
その重心を絶えず地に踏みおろす、
あの堅忍なゴールの血液が
この建築を豊かに生かしてゐるのだ！
歩む人の頭は見えない、けれども、
歩む人の頭はただ
吾等の想像のなかにある。
然しそれは切りとられても
たしかに生きた存在として
私たちの胸の中に描かれる。
歩む人は生みゆく人だ、

創造
獲得

歩む人は創める人だ。
 歩む人のみにこの世界は
 意義ある存在となる。
 蔑視せよ、静止を、停滞を、
 苦しきも欣びもない無力を、病弱を。……
 それは天馬のやうに
 吾等の誇張する「自由」をたのみとしなさい、
 「自由」も生むものだ、造るものだ、
 陣痛の苦痛のなかに
 つき進み、つき進み獲得する
 一つの力だ。
 歩む人は踏みゆくことによつて



歩む人 作ンダロ

歩む人
進化の道が
踏みゆくこと
と迷ふか
と迷ふか
と迷ふか
と迷ふか
と迷ふか

彼自らの自由をつくり、
踏みゆくことによつて
地上の味あじひを知り、
踏み行くことによつて
彼方かたより此方こなたへと
進化の道がつくられてゆくを知る。
歩みこそ法則だ、
歩みこそ行動だ、
歩みこそ思想をば
夢と迷妄との淵から醒まして
その精髓を明かにさし示す。

歩む人は
さきへ
さきへ
さきへ
さきへ

歩む人は往く、大地を、
歩む人はすすむ、日も夜も……
かぎりなく「時」の間を
星のごとくに運行する。
歩む人には過去なく
歩む人には環境なく
歩む人には莊嚴な孤獨のみ
意志と行爲を一つに結びつける。(現代日本詩集)

三 生命と科學

永井 潛

永井 潛
生理學者
醫學博士
東京帝國大學教授
廣島縣の人
明治九年(五三)生

愛らしい幼女が、愛らしい人形と共に眠つてゐる。其の艶々しい髪、其の福よかな頬、其の蕾の様な唇、何れをそれと分けがたい

のである。が併し、其處に非常に相違のある事を、誰しも疑ふ者はないであらう。一には命があり、一には命がないのである。一粒の種子、一粒の砂、土に散らばつて居る時、殆ど見分けることは出来ないのである。さりながら、天日輝き、慈雨潤ほす時、其處に非常な違ひが起つて来る。見よ、可憐な雙葉、練絹の様な白ら根、刻々に延びる、太る、臙て目も覺めんばかり美はしい花が咲く。枝もたわゝに實が結ぶ。彼は實に命なき土から命あるものを造る。終に枯死する。さりながら自ら若返らすことによつて、永遠に生き延びる。一粒の種子、摩尼寶珠のそれよりも尊い力を有つて居る。それは命の力なのである。お、命、なぜ少女は生きて居るのに、人形は生きて居ないのであらう。なぜ砂に宿つて居ないものが、種子に恵まれて居るので

摩尼寶珠
離垢即ち龍王の腦中
より出るといふ玉

遊星
惑星ともいふ。太陽の周圍に楕圓狀の軌道を描いて運行する天體で自らは光を放たない

あらう。此の問題くらゐ、最も明白で同時に最も不可解であり、最も平凡で而して最も高遠であり、最も舊うして且つ常に最も新しい問題は、他にないのである。「命」此の一語こそ、實にあらゆる謎の謎であり、あらゆる中心の中心である。科學も哲學も藝術も宗教も、あらゆるものは、皆此の命の太陽を旋つて動きつゝある一遊星に過ぎないのである。萬物悉く皆偉大なる太陽の徳を顯現するやうに、吾等は一齊に限りなき生命の力を稱へなければならぬ。宗教家はよろしく宗教の立場より、藝術家はよろしく藝術の見地より、哲學者はよろしく哲學の立脚點より、科學者はよろしく科學の本義より。而して今私は茲に自然科學の一學徒として、科學者の直面せる生命觀を述べんとするのである。

自然科學の見地より生命を論ぜんとするに當つては、先づ自然科學とは如何なるものであるかを明かにして置く必要がある。自然科學研究の對象とする所は、自然界現象界であつて、客觀的に、忠實に、冷靜に、事實を體驗し、多くの體驗を基礎として通有不變の法則を歸納せんとするのである。そして又此の法則に據つて、萬有の諸現象が、如何にして起るかを説明せんとするのである。其の際、科學者はある假定を設けて、其の説明を容易ならしめんとする。即ち「物質」「力」及び「エネルギー」等の實在を想定し、時間・空間並びに因果律の約束の下に宇宙間に於けるあらゆる現象を、牽引・反撥に因つて惹き起さるゝ微小體の運動に導いて、數理的にこれを解析せんと力める。そこで科學の解説は極めて的確明瞭であるが、しかも究極の知

エネルギー
物理學の術語
仕事をなし得べき能力
因果律
一切の自然現象は必ず其の原因を有し、原因あれば必ず結果があるといふ原理

デュボアレーモン

Emil Du Bois Reymond
(1818—96)

ドイツの生理
學者

識とは言へない。科學に於ける學說の基礎をなして居る「物質」とは何ぞ、將た「力及び「エネルギー」とは何ぞと言ふに、所詮一つの概念であると言ふ外に、せんすべがないのであつて、其の本質に至つては、到底科學に依つて明かにすることは出来ない。かのデュボアレーモンの有名な「自然界認識の限界」と題せる講演に於て、這般の關係は最も明白に説かれて居る。斯く、科學が客觀的、物質的、經驗的、分析的であるに反して、哲學は主觀的、精神的、思辨的、綜合的である。科學が、個々の事實を基礎として、歩一步歸納的に理法を明かにせんとするの安定性をもつに對して、哲學には、動もすれば單に冥想、直觀の力に任せて、一躍演繹的に事實を律せんとする危険性がある。しかも斯くの如きは多く過去の事に屬し、今日では哲學的思索も亦、確實なる

諸科學の科學

science of sciences

事實を基礎として、其の思想の系統を組織し、諸科學に由つて得られた知識を、大局に立ちて批判し統一せんとするに至つた。此の意味に於て、哲學も亦一つの科學であつて、所謂諸科學の科學と稱すべきものとなつた。自然科學の對象とする所が、物質的、現象的であることから、自然科學なるものは、單に事物の皮相に觸れるだけで、所詮其の真相に洞徹することは出来ない、と言ふが如き考を懐く人も少なくないのである。併しながら、かゝる考へ方は、決して正當とは言へない。抑も、かゝる考の根柢をなすものは、本體てふ觀念である。而して此の本體てふ觀念の起るのは、變化の中に不易を認め、幻影に對して實在なるものを想定するからである。しかも翻つて考ふるに、變化と言ひ、不易と言ひ、幻影と言ひ、實在と言ふ、

何れも相對的なものであつて、斷じて絶對的なものでない。思ふに、變化あればこそ、茲に初めて不易と言ふことが言へるのである。幻影を考へる事によつて、初めて實在を想定することが出来るのである。随つて世に絶對の變化もなければ、絶對の不易もなく、將た全然幻影を超越せる實在なるものも、あるべき筈がない。丁度それは、靜止なき運動を考へることも出来なければ、運動なき靜止を考へる事も出来ないのと同じである。其の意味に於て、宇宙は、運動であつて同時に靜止であり、變化であつて同時に不易であり、幻影であつて同時に實在であり、物質であつて同時に精神であり、我であつて同時に外界であらねばならない。凡ては相對的關係の下にあるのである。又其の意味に於て、差別なければ思考はない」と言ふことは疑ひなき眞理であ

ポアンカレ

Henri Poincaré
(1854—1921)

佛國の數學者
物理學者
哲學者

る。随つてポアンカレの言つたやうに、あらゆる學問は相互關係の系統に外ならないのである。○自然科学といひ、哲學といひ、何れも此の相對的關係を論究する學問であつて、唯々、其の立場を異にせるに過ぎないのである。随つて、其所に高下のあらう筈がない。自然科学が因果律に依つて、宇宙の事象が如何にして起るかを説明せんとするに對して、哲學は其の意義、其の價値、換言すれば「何の爲」といふことを啓示せんとするものである。斯くて科學と哲學と相待ち相助けて、初めて圓滿なる宇宙觀、人生觀を期待することが出来るのである。(科學的生命觀)

四 自然詩人

土居光知

我が國の最初の自然詩人は誰であるかと尋ねたならば、多くは

土居光知

英文學者
東北帝國大學教授
高知縣の人
明治十九年(西曆)生

山部赤人
奈良朝時代の歌人
聖武天皇の頃の歌人
その歌は萬葉集・拾遺集にある

西行

鎌倉時代の歌人
俗名は佐藤義清
建久元年(一一五〇)寂
年七十三
その歌集を山家集といふ

芭蕉

江戸時代の俳人
本名は松尾宗房
三重縣伊賀國の人
元祿七年(一六九六)歿
年五十一

目録
山部赤人
西行
芭蕉
山家集
拾遺集
萬葉集

山部赤人と答へるであらう。西行も芭蕉も赤人を祖として居る。然らば、赤人の自然に對する愛は如何なるものであつたらうか。赤人の歌を読んで特に注意されることは、瀨の音ぞ清き「清き白濱」など、清きといふ語の續出することである。彼が愛したのは清淨な自然である。



山部赤人
藤原信實筆

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りける。の歌に於て、彼が讚美したのも清淨の神々しさであつて、今日の登山家が喜ぶやうな偉大な力の感じを中心にした山岳美では

なかつた。彼が自然の清淨さを讚美した裏面には、人生の汚濁さを厭惡する心があつたであらう。

當時、奈良の社會は既に寵臣が權を専らにし、風俗が糜爛し始めてゐた。彼の祖先は顯宗・仁賢の二天皇を奉戴した伊與來目小楯であるらしく、山部の姓が示すやうに、世々、山林官であつたとすれば、自然に親しむ性情を遺傳して來てゐたのであらう。又「赤き心」などにおける、赤きと「清き」とは、古代語として同じ意味を有することを考へれば、赤人の名にも清淨を慕ふ心のあることが察せられるではあるまいか。そして、奈良の都會生活を見ると既に腐敗し、彼をして面をそむけさせるものがあつた。そこで、彼は清淨なものを慕ひ、自然の中に放浪した。彼以前の自然の歌は、人生の裝飾或は背景としての自然、官能的に快感を

山部赤人
西行
芭蕉
山家集
拾遺集
萬葉集

顯宗天皇
第二十三代
仁賢天皇
第二十四代
伊與來目小楯
播磨の國司

先達
こゝでは藝術に長じて同輩の師ともなる人

與へる自然の歌であつた。赤人に至つて始めて、清き自然を汚れた人生に對立するものとして、精神的に自然を愛したのである。彼が西行及び芭蕉の先達となり、最初の自然詩人と目せられるのは、彼が精神的な自然の發見者であるからである。斯くて彼の自然の歌は、曾て類のない清新幽玄なものとなつた。二三の例を示せば、
鳥羽玉の夜のふけゆけばひさぎ生ふる
春の野にすみれ摘みにと來し我ぞ
西行は、友を想ふ心を其のまゝに移して自然を愛した。彼が世を遁れた所縁は、友人を失つた悲しみか、若しくは其の他の理由

かは知らないが、併し、斯かる心は彼の自然に對する心持の中に感じられる。

吉野山梢の花を見し日より

心は身にもそはずなりにき。

ながむとて花にもいたく馴れぬれば

散るわかれこそ悲しかりけれ。

ひとり住む片山かげのともなれや

あらしに晴るる冬の夜の月。

彼は自然を友として愛すれば愛する程寂しくなつた。そして寂しい心に調和する寂しい自然を友として交はらうとした

心なき身にもあはれは知られけり

鳴立つ澤のあきのゆふぐれ。

おぼつかかな秋はいかなる故のあれば

すずろに物のかなしかるらん。

訪ふ人も思ひ絶えたるやまざとの

寂しさをなくば住みうからまし。

斯く彼は寂しさを友として、其の奥深く辿つて行つたのであるが、寂しさの奥には尙ほ深刻な寂しさがあるばかりで、愛の眞の歡びは見出されなかつた。

行方なく月にころのすみすみて

果は如何にかならんとすらん。

風さえて寄すればやがて氷りつつ

かへる波なき志賀のからさき。

秋深みよわるは蟲のこゑのみか

聞く我とともたのみやはある。

斯くの如く西行は寂しさの奥へ奥へと辿つて行つたが、これは輝く光明の道ではなかつた。それは、當時の時代思潮に於て、人間の愛と自然の愛とは相對立するものであつて、自然の愛は心情の願ひの否定であつたからである。西行は此の寂しさに堪へかねて、また「人」を懐かしく思つた。

寂しさにたへたる人のまたもあれな

いほりならべん冬の山里。

花も枯れ紅葉も散りぬ山里は

寂しさをまた訪ふ人もがな。

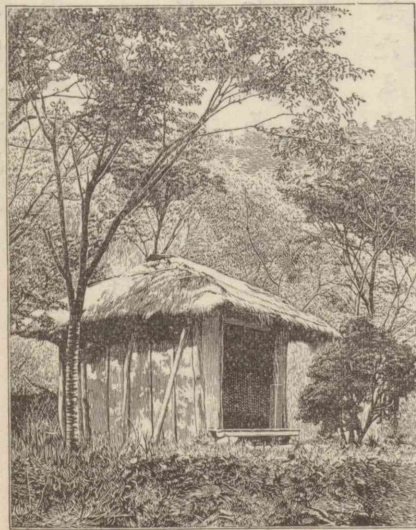
併し、當時の厭世觀の中に育ち、これを超越することの出来なかつた彼は、人間の愛に歸つて行くことが出来なかつた。

吉野山やがて出てじとおもふ身を
花散りなばと人や待つらん

わたの原遙かに波を隔て来て

都に出てし月を見るかな

斯くて、彼は眩しい光明にも、大きい歡喜にも、力強い信仰にも接せず、未來に對する淡い希望と自然の寂しい慰藉との中に生を終へたのである。
入日さす山あなたは
知らねども
送り返きつる。



吉野の西行庵

もろともに我をも具して散りね花

憂世を厭ふころある身ぞ。

願はくは花の下にて春死なん

そのきさらぎの望月の頃。

西行の偉大な點は、厭世脱俗の態度を誇示して瘦我慢をするところがなく、斯かる自然の心によつて慰められないで、人間を慕ひ、何物かを眞に愛しなければ居られなかつたことと、心の奥底から寂しがつた點とにある。これは安價な、愛のない悟に安住し、寂しさを弄び、洒落でごまかす人達とは比較にならない。寂しがるといふことは、愛せずには居られない詩人の運命である。要するに、西行の自然の愛は、赤人が歌つたやうな清淨な自然としての愛と人間愛とが合一されたものであつたと言ふこ

とが出来よう。

この道や行く人なしに秋の暮

うき我をさびしがらせよ閑古鳥

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる。

の如き句を遺した芭蕉の道も、西行の辿つた道と餘り變らな

つた。但し態度の推移がある。私は次に二三の簡単な例歌を

擧げて、赤人・西行・芭蕉の態度を説明しよう。

春の野にすみれ摘みにと來し我ぞ

野をなつかしみ一夜ねにける。(赤人)

かきわけて折れば露こそこぼれけれ

浅茅にまじる撫子の花。(西行)

花の枝に露の白玉ぬきかけて

折る袖ぬらすをみなへしかな。(西行)

山路きて何やらゆかし葦草。(芭蕉)

赤人は自然の素樸を愛し、自然と融合することが出来た。これが平安朝の感傷的な詩人ならば、眠り得なかつたであらう。西行の愛は感傷的である。彼は愛の対象であるものを捉へようとするが、それは露のやうにこぼれてしまふ。其の露も彼には涙として感じられる。美は彼の心を憧れさせ誘つて行くが、捉へ得るものではなく、いつまでも満足を與へない。芭蕉の心は西行の抱いて居るやうな感傷的な愛の否定を経て來た。此の否定は個物に對する執着の否定であつて、愛そのものを殺したのではない。彼の心には対象のない廣やかな愛が動いて居る。彼はもはや葦を摘まうとも撫子を折らうともしない。彼は葦

を透して普遍を眺める。そして彼の愛は一刹那の間、葦草に依
存してゆかしさの漣を起す。其の漣が俳句の表現である。
空まな事に事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるる。(西行)
何の木の花とも知らず匂ひかな。(芭蕉)
眞菅生ふる荒田に水をまかすれば
嬉し顔にも鳴くかはづかな。(西行)
菜畑に花見顔なる雀かな。(芭蕉)
の如く、芭蕉の詩魂は象徴の世界に憩ひ、普遍から個物を顧みる
故に、逼らない所があり、ユーモアが漂ふ。此の態度はまた無感
なやうに見える鋭感、冷淡なやうに見える無限の同情、無關心な
やうに思はれる愛慕と熱情とを有する。次の句は此の心の表

ユーモア
滑稽
有情滑稽
humour

現ではあるまいか。

静かさや岩にしみ入る蟬の聲。

猿を聞く人捨子に秋の風いかに。

酔うて寝ん撫子咲ける石の上。

斯く言ふことは、強ちに俳諧の逼らない、所謂さとりすました態
度を和歌の詠歎の心持の上に置くことではない。芭蕉もまた、

稲妻にさとらぬ人のたふとさよ。

と言つて居る。安價な悟りは抒情詩の源までも涸らしてしま
ふ。

芭蕉から徳川時代の終に至るまでには、表現の技巧、また新奇な
趣味の開拓はあつたが、深さと純粹さとに於て、自然に對する愛
が成長したかどうかは疑はしい。自然の愛の新しい要求は、明

松平定信

江戸時代の政治家

歌人

樂翁と號した

福島縣磐城國白河の

城主

老中となり幕府の政

を預ること二十餘年

文政十二年(二四)薨

年七十二

孔子

名は丘

字は仲尼

中華民國春秋時代の

人

儒學の宗師

西曆前四七九年歿

年七十三

耳順

論語に「六十にして

耳順ふ」とあり、依

つて六十歳を耳順と

いふ

治に入つて、人々が西洋文學に接するやうになつてから加はつたのである。(文學序説)

五 花月草紙のふしぐ

松平定信

誠のこと

わが誠より貫き出づれば、見ざることも見え、きかざることもきこゆめりといふは、いと至りしことにて、それをばかの孔子の君も、むそぢにて耳順ふともものたまへりしぞかし。さるに、我がともがらの色にそみ、香にめづる心はさらなり、聊かもほりする心あれば、誠をおほふにぞ其のさかひに至ることなき。(第四四段)

月のこと

月のさしのぼる頃、曙のそらおほえて横雲のたなびきたるに、や

や匂ひそめたれど、遠山の梢にいさようて、姿も見えず、からうじてさし昇りけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近寄る程、あやにくに月の方より雲の中へ



松平定信

かき入るやうに見ゆ。こはいかにせんと暫しうちまもるに、雲の端つかたあかう見ゆるにぞ、出で離れたらば、はやかゝらんくまはあらじと思ふに、いつのまにか又

白雲の月待ち顔にたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれてうち見るに、初めの雲より出でたる光いと新しう見えて、殊にさやけし。かの待ちゐたる雲に向へば、又馳せ入るもいとつらし。(第三段)

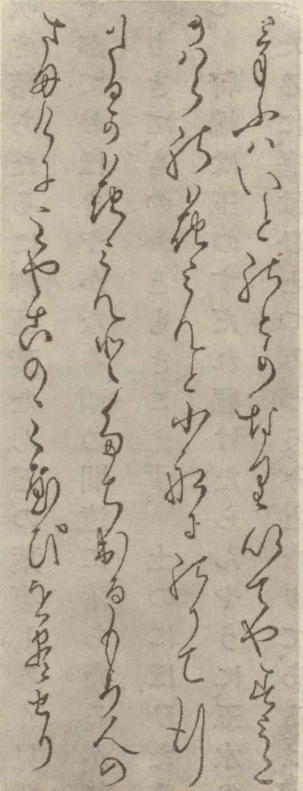
雨の興

衣うるほせども
唐の劉長卿の詩に
「細雨衣を濕して看
れども見えず。間花
地に落ちて聴けども
聲なし」とある。

「月の夜半こそ思ふくまもなく、心のそこも澄みわたりぬるものなれ。されど、闇の夜の空はれて、星の光さやかなるに、風たかく吹きかふは、またまさりぬるやうにおほゆ」といへば、雨ぞいとまさりぬるを」といふ。
「いかに」と問へば、「いでや、早天の雨はさらなり、草木の花咲きみるも、みなこの恵にこそあんなれ。またその感情のふかさを言はば、けふは元日なりけりといふに、雨そほ降りてかすみわたりたるは、げに春やとぞ思ふめる。師走のみそか、のどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。
すべて春は雨こそそのどかなれ。軒端より霞みわたりて、いとこまやかに降れるが、衣うるほせども、降るとはみえず。軒の玉水も間遠に音して、すみ捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭のおもの

枯生の底に緑や、そひ行くも、柳の絲の動きもやらで、露添ふも、共にいとどのどかなり。

ともし火かゝげても、なにとなく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心すみわたりぬるものぞかし。その外、梅が香のしめり、夜ぶかくにほひわたるも、花にうしとかこちぬるも、あはれはありけり。春も老い行くころ、蛙の時得がほにすだくもをかし。ほととぎすの初音いかにとおもふころ、村雨のはらくと降り



花月草紙の紙一
松平定信筆

出でたるも。五月雨のいく日も降りくらしで、ふみの巻々くりかへしつゝ居たれば、なにとなく世の中のことにも遠ざかりぬるこゝちぞする。

また、暑さに堪へかぬるころ、雲のみなぎり出づる勢ひありて、風ひとしきり吹き落ちたるに、柳蓮葉などの葉裏しろく見せたるも涼し。やがておほきやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降りきて、ものおともきこえず。土のにほひたるもいと心地よし。軒端は玉のすだれ懸けたらんやうに、玉水のたえまなく落ちたるに、庭はひとつみづらみとなりて、あるは瀧おとし、または水はしらせたるに、人々しばし物いはで、うちまもりゐたるもをかし。

やゝ雲うすくなれば、池の面にはかぞふるばかり雨みえて、小鳥

など庭へをどり出でて、餌拾ふさまなり。はじめ雲のたちいで

し方は、はや空の一しほ緑にみえて、虹など見ゆるに、木々の緑の庭潦にたづみに影見ゆるもいとすゞし。

老いたる女など雷かみの音に驚きて、はひ出でたるが、今日のは幼わかかりしときのごと、よく霽れにけり。

いま時のは、かく霽るゝことまれなり。『なんど、はや、繰言いふもあり。

『かれはかくあわてき。』などいひて、かたみに笑ひとよみつゝ、今日は蚊もすくなかるべし、雷かみの音もいとかすかなり。このごろの暑



吾 安 社 廣 夜 重 雨 筆
吾 安 社 廣 夜 重 雨 筆

萩の上風

秋はなほ夕まぐれこそたゞならね、萩の上風萩の下露
(藤原義孝集)

さもわすれぬ。とて、端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙かはづの、もの待ちがほに空うちにらみて、ふつゝかなるねになくもをかし。
秋來るころの雨は、昨日にかはりて、なにとなうさびし。萩の上風かぜ、外山の鹿の音なんど、月よりも身にしむこゝちぞする。常にさゝなれしかけひの水の音までも、あはれふかくこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいて、やゝ夜寒のころ、鳴きからしたる蟲の音の、雨の小止とどみにかすかなる聲して、枕ちかく鳴き寄るもあはれなり。
『この雨に木々もそめなん。』と思へば、茸たけのこなども生ひいでなん。栗もはや落つべし。などと、わらはべのものさびしげに、ともし火に向ひつゝ、いひ出づるも、げにさまゝなり。夜ふかき鐘の音の

尾花

穂の出たすゝき



龍膽



打ちしめるものから、さすがに秋は聲さえて聞ゆるにぞ、鐘つく人の心をもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊のうつり行きて、ひとさかり見するも、尾花の露おもげにうちしをれたるに、龍膽りゅうたんのうらみ深く咲きたるあたりもつきゝし。あさがほの、みな枯れたる中に、さゝやかにあかう咲き出でたるが、晝過ぐるまでも萎みおくれたる、またあはれなり。
野分のわかの風は、おどろくしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあはれを添ふるは、秋の習ひなるべし。時雨のさと音して、夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも、あはれふかき物には侍らずや。といへば、かうやうにいひ並べては、げにもと言ふべからんが、一

年もふる心地してよみ見れば、この雨はをとつ日より降り出てしを、とおもふ心はかはらじ。と、心のうちに思ひて、聞きぬしもまたをかしかりけり。(第三〇段)

(花月草紙)

村田春海

徳川時代の國學者
江戸の人
文化八年(西七一)歿
年六十六

六 琴後の餘韻

村田春海

法

よろづ何の業にも、古へより法となすしるべありて、それによらざらんはまことの心を得難く、其の法を得たるはまめやかなりとて人もうべなふめり。こはもとより理さる事ながら、深く事のもとを考ふるに、萬の事はじめに法を設け置きて、後にそのわざをなし出づるにはあらず。そのわざあるが上にこそ、法てふ



春の網代……
すさまじきもの、ひるほゆる犬、春のあじろ、三四月の紅梅のきぬ(中略)八月のしらがさね
(枕草子第二一段)

世の人のことわざ

ことは出で來めれ。かゝれば、わざは本にて法は末なり。かれ何の業にも、よく心をふかめて其の道に入りたらん人は、われより法をばはじめつべし。(燒畫記)

空蟬の世の人のことわざ、よろづに様々なれど、時にそむき折にあはてつきんしからざらんは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火のあたゝかなるを思はず、冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつべし。古へ人も春の網代、八月の白襲をこそ、すさまじき事のためしには引出でたりけれ。かゝればはかなきすすさみも、折にあひたるはをかしく、見所なき木草も時を得たるは、めづらかになん覺ゆめる。しかはあれど、人草しげき衢の、所せく門立ちならべたらんあた

りには、時を過ぐし折を失ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花にうとく、水に由あるは山はるかにて、四つの時のゆきめぐりに隨ひて、心をやるべきすまひはいともく難しや。(隨時樓記)

世のならはし

あはれ、世のならはしこそはかなきものにはあなれ。貴き賤しき品いと異なりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、たゞ足らはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとは梢の嵐を恨み、月をめづるとしては尾上の雲をいとふためし、誰かは免るべき。林に宿る鶉は、わづかなる小枝の蔭をのみたのみ、流に水もとむる鼠は、たゞ腹ふくるゝに過ぎずとこそ、古への人もいひつれ。かゝる理をだにわかたば、限りあるこの世に限りなき事を思ふべきかは。(知足庵記)



林に宿る鶉
鶉深林に集くも
一枝に過ぎず。偃鼠
河に飲むも、満腹に
過ぎず。(莊子)

文一くさを作り出でんには

すべて、ふみ一くさを作り出でんには、おのがひとり思ひ得たるふしありて、人のたすけとも成りぬべきすぢあらば、なしてもありなん。はかくしき心もあらで、たゞ人の言へることをのみ拾ひ集めつゝ、おのが思ひ得たらんさまに言ひなさんは、いと品おくれたるわざなり。なまくなる初學の人は、ことのゆるよしをもよく知らねば、いちはやきわざなりとも思ひぬべし。されど心ある人の見ば、おのづからあなづりおとしむべき業にこそあなれ。(若桂序)

手かく業

人のことわざ多かる中に、しなわかるゝものは、手かく業になんありける。そが中に、先づうち見てけぢめいちじるきものは、ゆ

筆蹟

月にうきくまとなら
じときりの葉の、秋
たつからにちりはじ
むらん 春海

いよす
伊豫簾の訓
愛媛縣伊豫國から産
するすだれ

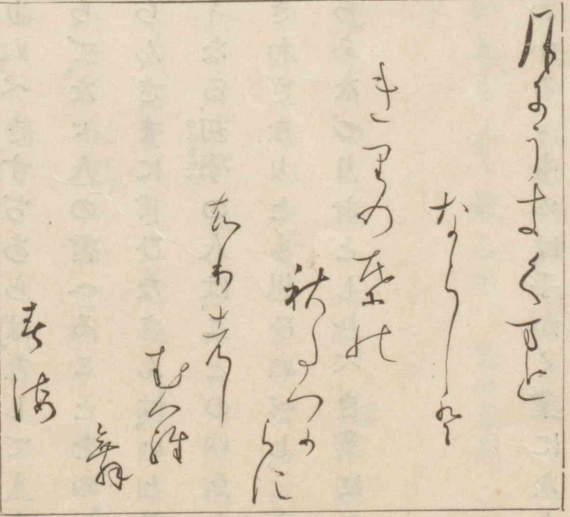
きかひぶみの書きざまなりけり。はかなき筆のすさみに、あやし
しくも、あてにも、いやしくも見
ゆるものにしあれば、いとつ
つましきわざなりや。

(行きかひぶりの序)

月に對して志を

言ふ

いよす高うかゝげて、ふけゆく
影を獨りうちまもりて、つらつ
ら思ひ見れば、おのづから心の
塵も名残なくて、なべて萬のことぐさこそくまなく思ひ出でら
るれ。さるは千草の花に露のにほひを添へ、絲竹いとたけの音の響をす



春海筆蹟

ますらんたぐひの艶になまめいたる、よのつねのをかしさをば、
更にも言はじ。いでや澄みのぼる光の高くあらはれて、人の目
とゞめに、まばゆきばかりなるも、時のまにあやなき霧のまよ
ひにかき消たれて、たゞ聞かとはかりたどり、中空にしばしあり
と見ゆるも、やがて雨になることのとゞめ難きや。浮雲の定め
なくて、昨日はさかえ、けふは衰ふる世の有様こそ先づおほゆれ。
又淺茅が露にやどれども、所せくもおほえず、海原の波に浮びて
も、廣きを知られざるは、たかきみじかき、おのがじしの住みかの
きは、くにつけて、身のやすかる心しらひに、よそへつべきもあ
はれなり。
又おちたぎつ瀬々の白玉は、これがために心清さをませど、野澤
の水のにごりに宿りても、さらにみしぶの汚しさをきはざる

光を頼み
故らに光を頼み奮ふ
を俟たんのみ(音書)

は、世にたがひ時に忤ふ事なくて、光を頼み跡をかくすとかいふ
らんさかしき人の心のおくさへ汲みしられぬべし。
又有るを有りとも見ず、無きを無しとも定めあへぬ聖心のさと
りも、たゞ此の光をみがきてこそ照らすべけれ。かゝればいた
づらに我が世の傾くを歎き、老となるものとのみ打眺めんはい
ともいとも心あさしや。(對月言志といふことを題にて書けることば)

雪月花のさだめ

かきかぞふ四つの時につけて、むらぎもの心をやるわざなん多
かる中に、花をあはれみ、月にあくがれ、雪をよろこぶ三つのなら
はしこそ、世にたぐひなきすさみとはすめれ。ことさへぐから
人のためしにも、しきしまの大和の國ぶりにも、たかきもいやし
きもへだつる事なく、古へより今に通はして、これを歌によび、文

ことさへぐから人
雪月花の時最も君を
憶ふ(白氏文集卷二
十五)

に記してめであへるは、いづれをおとれりとも、いづれをまされ
りとも、品さだむべきたぐひならぬは、もとよりあげつらふべき
事ならねど、所にしたがひ人によりて、おのがじし心の引くかた
なくてやはあらん。

梓弓はるのあした、うらくと紐ときそむる花の心をと、はんに
は、先づかしこの野づかさ、この山ざと、露をしのぎ巖をたどり
て、名ぐはしき蔭を求めてこそ、類なき匂ひをも見るべけれ。お
どろなる垣ほのうち、あやしき伏屋の前に、一木二木を移し植ゑ
たらんは、なか／＼に花のおもてをぞふせつべき。

また眞萩さく秋のさかり、くまなき月の光は所をわかねど、ある
は高殿のすだれをからげて千里の空をのぞみあるは行く川の
流に浮びて水底の影をもてあそびてこそ、心の雲もはるくべけ

しづたまき
いやしきの枕詞
うつゆふの
こもるの枕詞
くさづつみ
やまひの枕詞

れ。小家しみゝに立ち並び、はたばりなきはひりの庭にうづく
まり居て見んには、塵あくたけがしさも澄み渡る光にいよゝあ
らはれゆきて、かへりては月うとかれとぞ覺ゆめる。
かゝれば月と花とは、所がらこそあはれもち添はるめれ。さ
るは、かたる翁がたぐひの、しづたまき品賤しくして、うつゆふの
さくくるしき住家にかきこもり居つゝ、くさづつみやもひにの
みかゝづらふ身は、かの高殿の望み、やかたのすさみは、いかでか
おもひかけん。又野山の遊びも、おのづから時におくれ、をりを
過して常に心にそむくふしなん多かめる。

かれ雪ばかりは此の二つにことなり。葎にとぢたる門のうち
も、たゞ一夜のうちに玉しく庭とうつろひ、あばらなる板屋が軒
も、時の間に銀をはやせるばかりに姿をかへもてゆきて、朝夕の

いぶせさも更に覺えず。また目なれたる市の巷も忽に景色を
そへて、いひしらぬ山里の思ひをなし、行きかふ商人の蓑笠まで
も見所ありと覺え、はかなき本草萬のものも、さながらめづらか
なりとのみ目とゞめらるゝは、たゞ居ながらにして境をうつし、
所をかふるとやいふべからん。かくてこそ心にたらはぬこと
なく、外にうらやむべきふしもあらね。さればこの雪にのみ翁
が心をよするも、所にしたがひ人によりたる老いのすさみなる
はや。(雪をめぐる記) (琴後集)

七月の前 上田秋成

文治その年の秋、八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣
でさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ

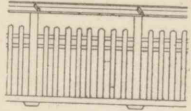
上田秋成
江戸時代の國學者
大阪の人
文化六年(西元)歿
年七十八
文治その年の年
文治二年(西元)
後鳥羽天皇の御代の
年號
鎌倉の大將殿
右大將源頼朝
鶴が岡
神奈川縣鎌倉町
鶴ヶ岡八幡宮がある

手輿



忌垣

神社の周囲の垣、たまがき・みづがき



法師

此の法師は西行法師なり

仕うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず遅からず、つらを亂さず練りいでさせ給へるを、大路に膝折りふせ畏みたまつる人数多あるに、警衛して、あなとだに言はせず、世にいかめしく尊き御有様なり。
かへりまをしして御手輿に召させ給ふほど、さとき御まなじりに見留めさせ給ひ、御階の忌垣のもとにかしこまり居る法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑていと瘦せくろみづきたるに、衣・杖・笠などもかたゐるものさましたるが、目を偷みて蹲まり居る、直人ならずおぼしけん、あの法師が修行するやう、名をも問へ。と仰せ給ふ。御輿添の若侍急ぎ走り寄りて、有難く御目賜へり。いづこよりの修行ぞ。名をも申せ。といふ。ゆくりなきに驚きざまして、雲水にありか定めずはべるものにて、名は圓位と申す。

穴熊のたけき獲物のたぐひならで

周の文王が太公望を見出したことを言ふ

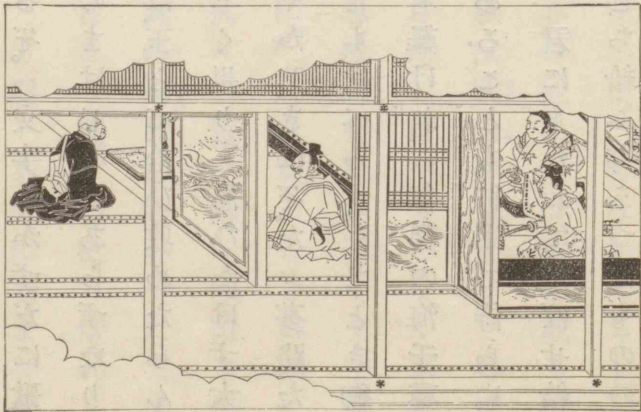
「西伯將に出獵せんとす。これを卜して曰く、獲る所は龍にあらず影にあらず熊にあらず龍にあらず。獲る所は霸王の輔ならんと。こゝに於て西伯獵し、太公涓水の陽に遇ふ」
(史記)

藐姑射の山

一 中華民國の古代に仙人の棲むといふ想像の山
二 上皇の御所なる仙洞を稱し奉る語

といふ。聞し召されて、さればこそ聞き知りたれ。穴熊の猛き獲物のたぐひならで、賢き人得たるためしに誘ひ歸らん。『わが後につきて來れ。』といへ。とて、召連れさせ給へり。

御館に入らせ、御装束改めさせ給へば、やがて、おほとなぶら數多照らしかゝげたり。『けふの道行づとゐてこと仰せ給ふ。』法師參れ。とて、おまし近き所の一間なる所の簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなき



頼朝西行に兵をく
百一人一首一話

八百日ゆく
八百日ゆく濱の眞砂
を敷かへて、玉に
なしつる秋の夜の月
(藤原長方)

伊勢の海・千尋の濱
伊勢の海千尋のはま
にひろふとも、今は
何てふかひかあるべ
き
(後撰集)

ものにおぼししみて、身は黒くやつしたれど、月花の歎きの譽は、物の心なき東人さへ聞き知りたるぞ。文字のかずだに歌とのみ思ひしもかう指向ひては、武士のまげじ心もあらずなりぬるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には、玉とて拾ひ收めたらんを、語りて聞かせよ。と仰せ給ふ。いみじく畏りて、思ひかけず大木の御蔭に参りはべれば、いともかゝやかしきにぞ、たゞ夢路たどるやうにはべりて、聞え奉るべきこともはべらず。さとき御眼に見あらはされはべるこそ、いとも有難けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひはべれど、かひあることも打出て侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも、もり聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御うつはものの大いなるに、おぼし寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへおぼ

し知りはべり、大空に羽うちつけて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あなかしこし。と申す。打笑ませ給ひ、弓取りし人の元の心の猛きには、詠む歌も直くあからさまにと聞くはまことか。歌は武士の荒々しき心には詠み移すまじきものに、宮人たちはさたし給へりとや。軍に出立ちて、笛鼓の音、馬の嘶きは物とも思はぬを、此の三十文字餘りのまなびには、心のおくるゝは如何に。此はかしこき御心にもおぼし惑はせ給ふものか。古への代々の帝は、馬に鞍置き御弓矢み取らして、御軍に立たせ給ひし、其の御歌を讀み見たてまつれば、猛く直々しく、調べもいと高しとこそ聞きわたり侍れ。いでや、歌詠まんとは、ますらを心をとり隠し、あてになよびかにのみ詠み移すべくするこそ、此の道のいみじき煩ひなれ。君がさ

大風起り雲飛揚す
〔漢の高祖の大風歌の
一節〕
烏鵲南に
月明かに星稀に、烏
鵲南に飛ぶ〔魏の曹
操の短歌行と云ふ詩
の句〕

秀郷
藤原秀郷
世に田原藤太と稱す
第六十一代朱雀天皇
の頃の人
鎮守府將軍

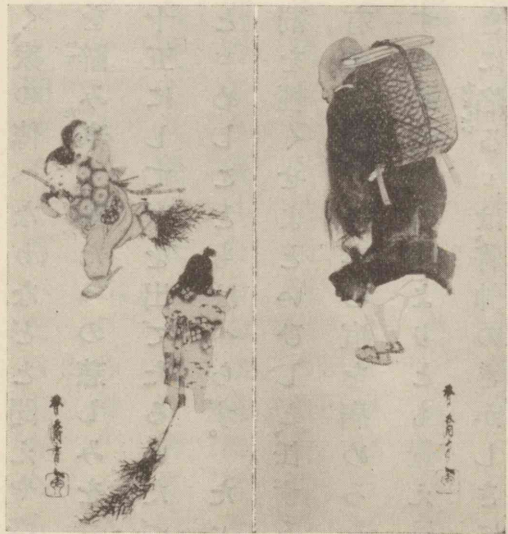
とく猛き御心のまゝにうちまねばせ給はんには、今の世の人誰
かは立ちあへ奉らん。三尺の劍を取りて、『大風起り雲飛揚す。』と
歌ひ、槊を横たへて『烏鵲南に。』と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に
遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじきを磨りみがかき、染殿の
やしほの色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど、谷深
き鶯のこゑ、信濃路出づる荒駒のあゆみ、何れの道、何れの業にも、
初めより優れたたらんは鬼にこそはべらめ。』といふ。
『人々、あれ聴き給へ。世は捨てのがれても、頼もしき人の心なら
ずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手と
なん聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそと思しし、いぬ
る事は忘れずてぞあらん。事一つことにても教へ承らばや。』
『こは益、恐れある御問はせなり。御物語のはては、つはもの

賞を重くし
明君の制、賞は重き
に従ひ、罰は輕きに
従ふ。〔説苑〕
病める士卒の疽を
吸ふ
卒に疽を病む者あり
起ためにこれを吮ふ
〔史記吳起列傳〕
竈を減らして人を
危きに陥る
齊の孫臏兵を率ゐて
魏國に入り竈を作
り、日々これを減ず。
魏の龐涓、齊軍散亡
せると思ひこれを追
撃し、孫臏の計略に
かゝりて敗る。
〔史記に出づ〕

の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師に
だにもの問はせ給ふことの忝さよ。向ひ奉りては、をこがまし
く、家の傳へなりなどと聞えや奉るべき。まして有難き大宮仕
を辭み奉り、親たちの慈しみをさへあだなるものに、年僅かに二
十五にして家を出でたるいたづらもの、弦ひき一つだに心に
とゞめしこともはべらず。たゞ一言の忘れ難きは、賞を重くし
罰を輕くせよといひしと、任ずる者を辱しむれば危しといひし
有難さよ。士卒の疽を病めるを吸ひしは、人の心をよく買ひな
すと雖も、眞の情よりも覺えはべらず。竈を減らして人を危
きに陥るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき
君の御心にあらず。軍を出だし給へることの怪しきまで賢く
ませるを、餘所ながら聞き奉るには、此の方の御問ひ免させ給へ。』

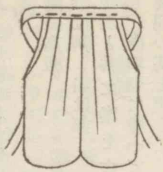
土器

かはらけ
瓦筒の義
釉薬を施さぬ土焼の
陶器の總稱
又特に土焼の盃を言
ふ
こゝは後者



とて、額を板敷にすりつけて申す。君笑みほこらせ給ひ、口とく
心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語り今ははたして
ん。人々と土器取りはや
し、曉かけて遊ばん。まれ
びとは酒飲まざるべし。
鹿しか、猿さるの中に立ちまじりて
歌詠めといふとも詠むま
じ。たゞわが前にて遊べ。
風ひやゝかなるにも、飽か
ず飲み、物きたなげに食ひ
ちらす人々は暖かにもこそ。此の火取、法師にまゐらせよ。とて、
しろがねもて作りたる猫の形したるを取傳へて、君より賜はる。

くさり袴



とて前に置きたり。「鹿猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ瘦
法師がためには、似つかはしき御賜ぞ。」とて、三たび押戴きぬ。
あした御暇賜はりて立出づるに、御館の人やどりに、誰殿の童な
らん、くさり袴の裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、
「これ取らせん。火埋みて手足あたゝめよ。」とて、かのきら／＼し
きものを與へて、顧みもせず立ちぬ。
童打驚き、これ見給へ。見も知らぬ法師の見も知らぬもの賜ひ
つるは。とて、青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を誰か
は得させん。盗みやしつる。といふ。更に。道のそらにか
かるものやはあるべき。あな恐し。殿に奉り給へ。といふ。や
がて御館にもて参り、仕ふる君を呼びいで、しかくのこととな
ん。と申す。「いと怪し。大將殿の法師に賜はりしを、いかで童に

右府

源頼朝

口に蜜あり、腹に劍

あり(唐書李林甫傳)

漢高

漢の高祖

姓は劉 名は邦

項羽と共に秦を亡

し、後項羽に勝つて

漢朝の基を開く

西暦紀元前二〇〇年

頃の人

曹孟徳

三國の魏の武帝

名は操

孟徳はその字

西暦紀元二〇〇年頃

は得させけん。訝し。とて、先づ急ぎて聞え奉る。君、打笑み給ひ、かのえせ法師、あなづらはしく幼げなる物くれしとて、腹立たしくや思ひけん、わが門の前に棄てゆきつるよ。法師とても男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど家を出でてなほ身を守り、才に誇りて、野山に交り、歌よみてのみあるは、捨人の捨てらるべきあさましさぞかし。一度えせ者の手に穢れしもの、其の童に取らせよ。とて、取りおろさせ給ひぬ。
西行、後に此の事を人に語りていふ、右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど心には針のおはずぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆此の君の網の中に入れられたるは、我が佛の冥福といふことをうまれ得させけん。たゞ悲しむべきは神の御裔の此の後やうく衰へさせ給はん世の姿

なるは。とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。

心なき身にも、これを聞きつたへては、秋の夕暮ならずとも、うちひそみぬべし。(藤箕冊子)

八百魚譜

横井也 有

鶉衣の發端

青によし奈良の帝の

御時、いかなる叡慮

にあづかりてか、此

の地の名産とはなれ

りけん

(奈良うちのはの替)

横井也 有

俳人 俳文家

名古屋藩の重臣

天明三年(一四三)歿

年八十二

人は武士

一休の狂歌と傳へら

れてゐるもの。下句

は「小袖は紅梅花は

みよしの」

「人は武士、柱は檜、魚は鯛」とよみ置きける世の人の口における、おのが様々なる物好きはあれども、この魚をもて調味の最上とせんに咎あるべからず。絲かけて臺にすゑたる男ぶりさへ、外に似るべくもなし。然るを唐土には、いかにしてか殊に賞翫の沙汰も聞えず、これに乗りける仙人もなし。されば夷三郎殿も、他の葉武者には目もかけず、たゞこれにこそ釣りも垂れ給へ。龍門瀧にのぼらんとする魚ありて、おほけなくも大聖の御子に

これに乗りける
列仙傳にある趙の琴
高が赤鯉に乗つて來
たといふ故事に比べ
たのである
大聖の御子
孔子の子のことで、
名は鯉

多能を恥づ
徒然草に「多能は君
子の恥づる所なり」

朝比奈
三郎義秀
和田義盛の三男
鍛曳き
平家物語卷十一、「弓
流し」に美尾屋十郎

と鍛曳のことが出て
ある
卷四第十七課参照
松江の名産
鱧のこと
松江は中華民國の河
名
蘇東坡の赤壁の賦に
「今は薄暮網を擧げ
て魚を獲たり。巨口
細鱗、狀松江の鱧の
如し」
張氏
晋代の詩人張翰
平家は
清盛が伊勢の國安濃
の津から熊野へ參る
時、大きな鱧が船に
入つたのを、目出度
がつたこと（平家物
語にある）
鮒は近江に
源五郎鮒
琵琶湖の名物、呂氏
春秋に「魚の美なる
もの、洞庭の鮒、東
海の鮒」
空也
或はこれ「中元」の誤
記かと

もこの名を借らせ給へる。されば世の名聲はかの鯛にも並ば
んとす。かれは如何なる幸にかあらん。味美なりといへども、
鯛の料理の品々なるには似るべくもなし。乾物、炙り物にせず、
繪清汁すましによろしからず、くづし蒲



く子をも威すべく、朝比奈辨慶にも肩を並べんとす。然るに記
録の上にしては、鍛曳きの外はさせる働きなくて、只二郎兵衛も
五郎兵衛も、同じつらなる侍なり。いかに世に名の事々しきぞ

横井也有

銚すしに用ひ難く、鹽にも鮓にも調ぜ
ず、只刺身、あつ物に止まるは、多能
を恥づ」と言ひけんを、なか／＼譽
と思へるにや。昔平家に悪七兵
衛景清と名乗りて、今民間には泣

とある人評したるものあり。かれ七兵衛が類なるべし。

松江しょうじょうの名産、我が朝にも品くならず。張氏はこれを秋風に思ひ

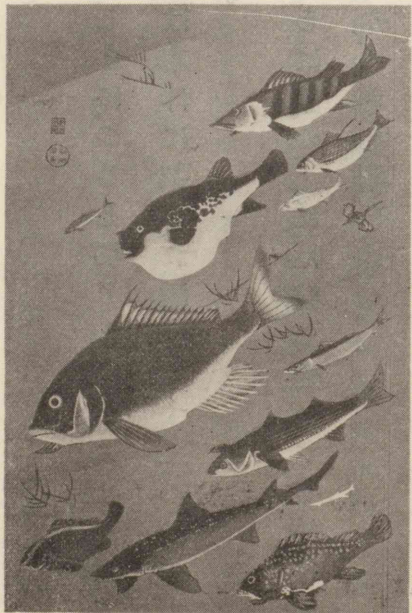
て仕途を辭し、平家はこれを船中に得て官路を進む。進退いづ
れをか羨むべき。

鮒は近江に洞庭の名を
くらべたる、鯉に似て位
階劣れり。名には紅葉

をかざしたれど、鱸は春
の賞翫となれり。

鮒は節饗の頃もてはやされ、梅さく頃を世に匂ふ。

鯖は初秋に祝はれて、空也の蓮の葉に上るは、後生善處の契も頼
もし。



伊藤若沖の魚群圖

鎌倉の海

兼好法師の徒然草に
「鎌倉の海に鰹と云ふ魚は……」(第一一九段)

木の端

思はん子を法師になしたらんこそは……
たゞ木のはしなどのやうに思ひたらんこそ、いといとほしけれ
(枕草子)

桀・紂

桀は夏代の王、紂は殷代の王、何れも暴虐を以て名を残してある

紫の上

源氏物語中に出てゐる女性

中宮

同上。「秋好む中宮」のこと
紫の上は春の曙を愛し、中宮は秋の夕暮を賞した

鰹は芥子鮓の風味、上戸は千金にかへんとも思ふらんを、鎌倉の海の素性を兼好に言ひ探されたる、いと口惜し。鰹節となりては、木の端の様にも思はれず、その梢とも見えずして花の名をさへ世に散らしぬる。

鮫鱈の唐めきて仔細らしきに、つるし切りとはいふせくして、桀・紂が料理めきたり。彼は本汁に選まれ、鱈は必ず二の汁の大將にて、搦手をぞ承りぬる。

もしは文字の理窟によらば、紫の上には鱈を愛でさせ給ひ、中宮の御膳には、ことに鰹をやめさせ給ひけん。

鮭は越路に名ありて、その國の雪にも似ず、色は入日の雪を染めて、うるはしく照りたるこそいみじけれ。たま／＼鱒といふ物も、その色は負けじとや挑むらんを。

狭夜姫

大伴狭手彦の妻

山の芋は鰻となる

(俚諺)

狭夜姫は石となり、山の芋は鰻となる。かれは有情の非情となり、これは非情の有情となれり。石となりて世に益なく、鰻となりて調法多し。

牡丹は花の一輪にて賞せられ、梅櫻は千枝萬葩を束ねて愛せらる。それが勝れりとも劣れりとも、更に衆寡の論には及ばず。

白魚といふものの世にもてはやさるゝは、かの鯛・鱸の大魚に比すれば、今いふ梅櫻の類と等し。然るに、國俗のとなへ異にして、

「しろ魚ともしら魚ともいへり。これ何れならん」といふに、さればしろ菊ともしろ鷺ともいはねば、しら魚といふこそよからめ。

といへば、かたへの童のさし出でて、否とよ世にしら猫ともしら鼠とも言ふにこそと打ち込まれて、こゝに物定めの博士しばらく默然たり。

物定めの博士

源氏物語帯木に左馬頭のことを叙して「馬頭、物定め博士になりてひいらぎ居たり」とあるを引く

鯰は濁江の
瓢箪で鯰をおさへる
(俚諺)

鯁
あかえいの事

文覺

平家物語卷五に「文覺
覺荒行」あり、文覺
上人が那智の瀧にう
たれて修行したことを記す
一休の口には
一休咄に、一休和尚
が蛸を好み、それを
頌して詩を作ったこ
とが出てゐる

鮎は鵜川の篝火に責められ、鯰は濁江の瓢箪におさへらる。比
目魚は黒白に裏表をあらはし、海鼠はあとも先きもなし。
齒にもたまらぬ鯁の骨は、何の爲に持ちたるや。それも海月の
なきには勝れるか。

こゝに蛸の入道は、壺に入りて取らるゝこそ愚かなれ。那智の
瀧壺ならば、文覺が行力をも傳ふべきを、一休の口には譽められ
ながら、まさなの法師の身の果てかな。
かながしらといふ名のめでたくてぞ、産屋の祝儀には使はれ侍
る。さるを、石持といふものの銀持とも言はば、世に如何ばかり
もてなされんを、益なき名を持ちて口惜しと思ふらん。
鱧、細魚は幼き心地ぞする。大男の髭口そらして食ふべきとも
覺えず。

鯨はたゞ釣る頃の面白きなり。里は砧に蚊帳しまひて、木曾に
便りよき人は、まだき新蕎麥喰ひたり。など、ほのめかされて羨ま
しき頃ならん。
泥鰌は酒の上に赤味噌程よく調じて、唐がらし加へたるこそよ
けれ。白味噌がちなる大宮人は、如何に喰ふらんとさへ覺束な
し。

鯰とは先づ名の不束なり。いかで無比の美味を備へて、あやし
き毒を持たりけん。その味ひと毒の世に勝れたれば、食ふ人を
無分別ともいひ、喰はぬ人を無分別ともいへり。

鰯といふものの、味ひ殊に勝れたれども、崑山のもとに玉を礫に
するとか、多きが故に賤しまる。たとへば田畠のこやしとな
るとも、頭は門を守りて天下の鬼を防ぐ。その功、鰐鯨も及ぶべ

食ふ人を：

ふぐ汁をくはぬたわ
けに、食ふたわけ
(俚諺)

崑山

崑崙山のこと
中華民国で古來有名
な玉の産地
鹽鐵論に「崑山の傍、
玉璫を以て、烏鵲を
抵つ」
頭は門を守り
節分の日に終と共に
門口に吊される行事

からず。されば歌人は鳥蟲に四季を分ちて、魚に四時の題詠はなし。俳人兼ねて魚を品題とするは、専ら味ひの賞翫を捨てざる故なり。然れば、歌よみは耳目の愛にとまりて、食は野卑なりとて取らざるに似たれど、かの喰ふべき若菜を専らにのみて、菜の花の美しきを歌の沙汰に及ばぬは、喰はれぬ故によまざるにや、無下に口惜し」と人のいひたる、さがなき詞ながらをかしかりけり。

(鶉衣前編拾遺)

九 幻住庵の記

松尾芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり。國分山といふ。そのかみ、國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る

松尾芭蕉

江戸時代の俳人

名は宗房

又の號は桃青

元祿七年(三五四)歿

年五十一

石山

滋賀縣近江國滋賀郡

石山町

唯一

唯一神道即ち純粹の

神道

兩部

本地垂迹の説にもと

づき神佛二教の旨を

合して一派を起した

もの。修驗道をさす

光を和げ

老子に「其の光を和

げ其の塵を同うす」と

ある

何某

滋賀縣膳所藩士

本多八左衛門

曲翠

芭蕉の門人

五十年や、近き身

芭蕉は當時四十七歳

こと三曲二百歩にして、八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像

とかや。唯一の家には甚だ忌むな

る事を、兩部光をやはらげ、利益の塵

を同じうし給ふも亦たふとし。日

頃は人の詣でざりければ、いと神

さび、物しづかなる傍に、住み捨てし

草の戸あり。蓬根、笹、軒を圍み、屋根

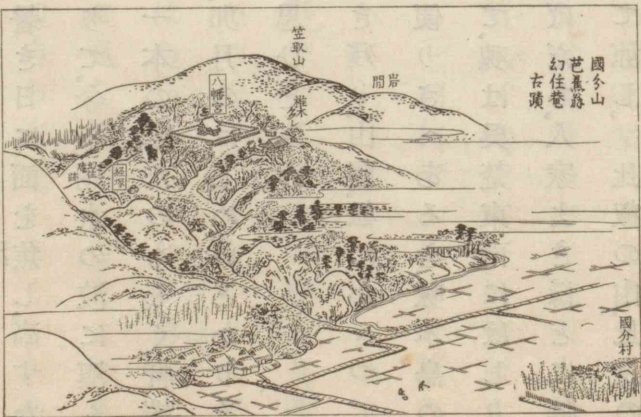
漏り壁落ちて、狐狸臥處を得たり。

幻住庵といふ。

あるじの僧何某は、勇士菅沼氏、曲翠

子の伯父になん侍りしを、今は八年

ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残せり。余また市



東海道路名所圖會

奥羽・象潟の暑き日に

奥の細道に記してある旅を指すやがて出でし

よしのやまやがて出でしと思ふ身を、花散りなばと人や待つらむ(西行)

吳楚東南に走り昔は聞く洞庭の水、今は上る岳陽樓、吳楚東南に圻け、乾坤日夜に浮ぶ(杜甫)

瀟湘 瀟水と湘水 洞庭湖に注ぐ河

洞庭 中華民國湖南省の北部この國第一の大湖南薰峰より

南薰峰より 薰風南より來り殿閣微涼を生ず(和公權)

笠取 笠取山 京都府山城國宇治郡

中を去る事十年ばかりにして、五十年や、近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面を焦し、高すなご歩みぐるしき北海の荒磯に踵を破りて、今年湖水の波に漂ふ。鳩の浮巢の流れとままるべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかりそめに入りし山の、やがて出でしとさへ思ひそみぬ。 さすが春の名残も遠からず、躑躅さき残り、山藤、松にかゝつて、時鳥しばし、過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥のつつくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂は吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。 山は未申にそばだち、人家よきほどに隔たり、南薰峰よりおろし、北風海を浸して涼し。 比叡の山、比良の高嶺より、唐崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。 笠

三上山

滋賀縣近江國野洲郡 富士山

武藏野の古き住家 芭蕉は江戸深川に住んだことがある

田上山 滋賀縣近江國栗太郡 田上村にある勢田川の左岸の山谷の俗稱

古人 猿丸大夫 墓は田上山麓にある

小竹生が嶽 滋賀縣近江國栗太郡 下田上村の南境の山

袴腰 滋賀郡石山町にある山

黒津の里 滋賀縣近江國栗太郡 下田上村字黒津

網代守る 田上や、黒津の莊の瘦せ男、網代守るとて色の黒さよ(近江輿地志略に引ける古歌)

取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞の叩く音。 美景物として足らずといふことなし。 中にも、三上山は土峰のおもかげに通ひて、武藏野の古き住家も思ひ出でられ、田上山に古人を數ふ。 小竹生が嶽、千丈が峰、袴腰といふ山あり。 黒津の里はいと黒く茂りて、網代守るにぞと詠みけん歌の姿なりけり。 なほ眺望くまなからんと、後の峰に這ひのぼり、松の棚作り、藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づく。 かの海棠に巢をいとなび、主簿峰に庵を結べる王翁徐佗が徒にはあらず。 たゞ睡癖山民となつて、辱顔に足を投げいだし、空山に虱を捫つて坐す。 たまたま心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。 とくくの雫をわびて、一爐のそなへいと輕し。 はた昔住みけん人の、殊に心

海棠に巢を
徐老海棠の巢上、王翁主簿峰の庵

風を捫つて
風を捫つて青山に對し、書を挾んで北園に眠る(王荆公)

とくくと落つる岩間の苔清水、汲みほすほどもなきすまひかな(山家集)

高良山
福岡縣筑紫國三井郡

甲斐何某
藤木甲斐守敦直

賀茂の神職 書家
慶安二年(三三〇)歿年六十八

木曾
長野縣信濃國木曾

越
越前越中越後の總稱

農談
野人酒を載せ來り、農談、日已に夕なり(朱子)

高く住みなし侍りて、巧み置ける物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物をさむべき處など、いさゝかしつらへたり。さるを、筑紫高良山の僧正は、賀茂の甲斐何某が嚴子にて、このたび洛に上りいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いとやすくと筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。やがて草庵のかたみとなしぬ。すべて、山居といひ、旅寢といひ、さるうつは蓄ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれく訪らふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里の男ども入り來りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、わが聞きしらぬ農談、日已に山の端にかゝれば、夜座閑かに、月を待ちては影を伴ひ、燈を取つては罔兩に是非を凝らす。かく言へばとて、ひたふるに閑寂を好み、山野に跡を隠さんとはあらず。

罔兩に
罔兩、景に問うて曰く、曩に子行き今子止る、曩に子坐し今子起つ、何ぞそれ特操なきや(莊子)

仕官懸命の地を
芭蕉は伊勢の藤堂家の伊賀に於ける城代の臣

佛籬祖室の扉
江戸に居た時、佛頂禪師に參禪したことがある

樂天
唐の詩人。白居易の字

五臟の神を
詩、五臟の神を役す(白樂天)

老杜
唐の詩人。杜甫

瘦せたり
知るや君、苦思、詩に縁りて瘦せしを(杜甫)

や、病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。つらく年月の移り來し拙き身の科を思ふに、或時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、頼りなき風雲に身をせめ花鳥に情を勞して、暫く生涯の計とさへなれば、終に無能無才に

よほのむ椎の木も夏木立

筆 蕉 筋に繋がる。樂天は五臟

の神を破り、老杜は瘦せたり。賢愚、文質の等しからざるも、何れか幻の住處ならずや、と思ひ捨てて臥しぬ。先づたのむ椎の木もあり夏木立。

あらはにもこの身苦しむひとときは尊きものもおもかけに來ず。(三ヶ島霞子)

平家物語の發端、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす

太政入道

平清盛入道して淨海と稱す

直垂

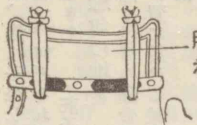
鎧の下に着る直垂

腹巻



胸板

胸板



嚴島の大男神

國幣中社 廣島縣佐伯郡嚴島町

一〇 重盛父を諫む

〔平家物語〕

太政入道は赤地の錦の直垂に、黒絲威の腹巻の、白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜の次に、靈夢を蒙つて、嚴島大明神より、うつゝに賜はられたりける。銀の蛭巻したる小長刀、常の枕を放たず立てられしを脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。
「貞能」と召す。筑後守貞能は木蘭地の直垂に、緋威の鎧きて、御前に畏りてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、この事はいかが思ふぞ。保元に平右馬助を始めとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一の宮の御事は、故刑部卿殿の養君にてまし、しかば、旁見放ちまゐらせ難かりしかども、故院の御遺

蛭巻



貞能

平貞能

筑後・肥後の守護

清盛の腹心の臣

保元

保元の亂(二六年)

平右馬助

清盛の叔父の忠正

新院

第七十五代崇徳天皇

此の時上皇にましま

した

一の宮

崇徳院の第一皇子重

仁親王

刑部卿殿

清盛の父の忠盛

故院

鳥羽法皇

第七十四代鳥羽天皇

平治元年(二九年)

平治の亂

鳥羽の亂

誠に任せて、味方にて先きをかけたりき。これ一つの奉公。次に、平治元年十二月、信賴義朝が謀反の時、院内を取り奉つて大内にたてこもり、天下暗闇となつたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追ひ落とし、經宗惟方を召し縛めしに至るまで、君の御爲に、既に命を失はんとする事度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば、七代までは思し召し捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづら者、西光と申す下賤の不當人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅ぼさるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されんと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずば、これへまれ、御幸をなし

信頼
藤原信頼
義朝
源 義朝

院
上皇の御所
此處では後白河上皇
を稱し奉る

内・大内

皇居
此處では第七十八代
二條天皇を稱し奉る

經宗

藤原經宗

惟方

藤原惟方

成親

藤原成親

西光

藤原師光

法皇
入道して西光と稱す

後白河法皇

鳥羽の北殿

城南離宮

京都の南部上鳥羽村
にその舊跡がある

參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者共が
中より矢をも一つ射んずらん。その用意せよと、侍どもに觸る
べし。大方は、入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍置かせよ。
着脊長取り出せ。とこそ宣ひけれ。
主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳せ參つて、世は、はやかう候。と申し
ければ、大臣聞きもあへたまはず、ああ、はや、成親卿の頭の勿ねら
れたんな。と宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御着脊長
を召され候上は、侍どもも皆打ち立つて、只今、院の御所、法住寺殿
へ寄せんとこそ出で立ち候ひつれ。暫く、世を鎮めん程、法皇を
ば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ、御幸をな
し參らせう。とは候へども、内々は鎮西の方へ流し參らせんとこ
そ、議せられ候ひつれ。と申しければ、大臣、何に依りて只今さる事

着脊長

主に大將の着る鎧



主馬判官盛國

平 維盛の弟季衡の

二男

小松殿

平 重盛の邸

京都八條の北、堀川

の西にあつた

法住寺殿

鳥羽・後白河兩法皇

の離宮

今の京都市下京區瓦

町三十三間堂の東南

鎮西

九州

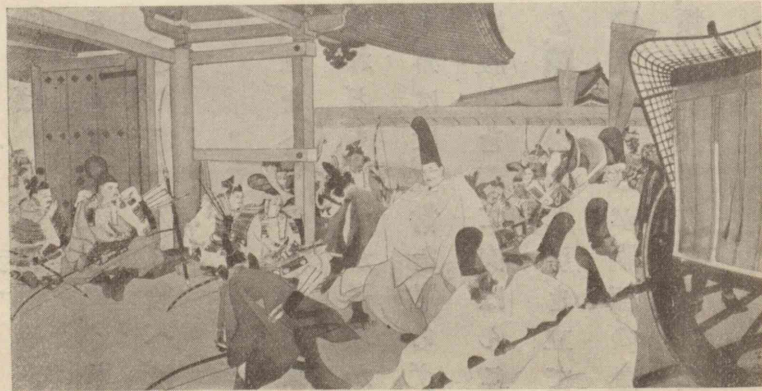
禪門

佛門に入りたる男子

此處では清盛をいふ

西八條殿

京都市西八條の清盛



重盛の西八條殿參入
高橋廣湖筆

のおはすべき。とは思はれけれど
も、今朝の禪門の氣色、さる物狂は
しきこともやおはすらん。とて、急
ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞお
はしたる。
門前にて車よりおり、門の内へさ
し入りて見給ふに、入道腹巻を着
給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各
色々の直垂に、思ひ思ひの鎧着て、
中門の廊に二行に着せられたり。
その外、諸國の受領衛府諸司など
は、縁に居こぼれ、庭にもひしと並

の邸
卿相
公卿
雲客
雲上人・殿上人
昇殿を許されたる人
受領
國守
衛府
近衛府・兵衛府・衛門
府
こゝはその官人をさ
す
諸司
院内司・膳司・鑄錢
司・齋院司等の司人
をいふ
烏帽子・直衣・指貫
五戒
佛教の語
不殺生・不偷盜・不邪



み居たり。旗竿ども引きそばめ引きそばめ、馬の腹帯をかため、
胄の緒をしめ、只今皆打ち立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏
帽子直衣に、大文の指貫のそばとつて、さやめき入り給へば、事の
外にぞ見えられける。
入道伏目になつて、あはれ例の内府が、世をへうずる様に振舞ふ
者かな。大きに諫めばやと思はれけれども、さすが子ながらも、
内には、五戒を保ちて慈悲を先きとし、外には、五常を亂らず禮儀
を正しうしたまふ人なれば、あの姿に腹巻を着て向はんこと、さ
すがおもはゆう恥しうや思はれけん、障子を少し引き立て、腹巻
の上に、素絹の衣をあわて着に着給ひたりけるが、胸板の金物の
少しはづれて見えけるを隠さうと、頻りに衣を引き違へ引き違
へぞし給ひける。

姪・不妄語・不飲酒
五常
仁義禮智信
素絹の衣
僧衣をいふ
小國の意
粟散は即ち小國なり
小主天下に散ずるか
くの如く多きなり
天兒屋根命
藤原氏の祖
(楞嚴經)

大臣は、舍弟宗盛、卿の座上につき給ふ。入道宣ひ出ださるるこ
ともなく、大臣も又申上げらるる旨もなし。やゝあつて入道宣
ひけるは、あの成親卿が謀反は事の數にも候はず。一向、法皇の
御結構にて候ひけるぞや。暫く、世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の
北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ、御幸をなし参らせ
んと思ふはいかに。と宣へば、大臣聞きもあへたまはず、はら／＼
とぞ泣かれける。入道、さていかにやいかに。とあきれたまへば、
やゝあつて、大臣涙を抑へて、この仰せ承り候に、御運ははや末に
なりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立
ち候なり。また御有様を見まゐらせ候に、さらに現とも覺えず
候。さすが、我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の
御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひし

三世の諸佛、解脫
幢相の法衣

過去・現在・未來の
一切の諸佛が解脫し
たことの標識となる
法衣

袈裟は解脫の標識と
なること、猶ほ幡幢
の物を標示する如く
であるのに譬へて幢
相といふ

普天の下王地に

溥天の下、王土に非
ざるなく、率土の濱、
王臣に非ざるなし

(詩經小雅)

穎川の水に耳を洗
ふ

中華民國の古の帝堯
が、帝位を譲らうと
言つた時、許由が耳
がけられたと言つて
穎川の水に耳を洗つ
たといふ故事

(莊子に出づ)

より以來、太政大臣の官にいたる人の、甲冑を鎧ふこと、禮儀を背
くにあらずや。就中、御出家の御身なり。それ、三世の諸佛、解脫
幢相の法衣をぬぎ捨て、忽に甲冑をよろひ、弓箭を帯しましませ
んこと、内には破戒無慚の罪を招くのみならず、外には仁義禮智
信の法にも背き候ひなんず。旁、恐ある申し事にて候へども、心
の底に旨趣を残すべきにも候はず。まづ、世に四恩候。天地の
恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これなり。その中にもつとも重
きは朝恩なり。普天の下、王地にあらずといふことなし。され
ば彼の穎川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命の
背き難き禮儀をば存知すところ承はれ。いかに況んや、先祖に
も未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才
愚暗の身を以て、蓮府槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の

首陽山に薇を折る

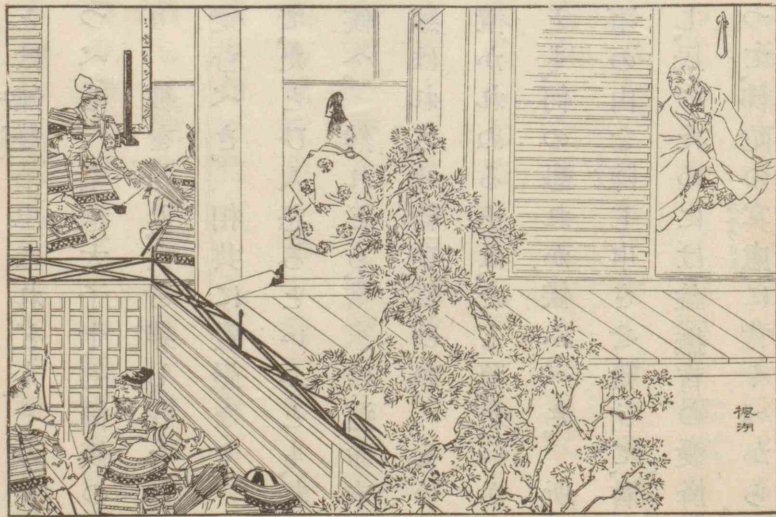
伯夷・叔齊は周の武
王が殷の紂王を討つ
のを諫めて聽かれ
ず、遂に周の粟を食
むを快しとしないで
首陽山に隠栖したと
いふ故事

(莊子に出づ)

蓮府・槐門

共に三公即ち大臣の
異稱

所領となつて、田園悉く一家の
進止たり。これ希代の朝恩に
あらずや。今、これらの莫大の
御恩を思召し忘れさせ給ひて、
亂りがはしく法皇を傾け參ら
せ給はん事、天照大神、正八幡宮
の神慮にも背かせ給ひ候ひな
んず。それ日本は神國なり。
神は非禮を受け給ふべからず。
然れば君の思召し立たせ給ふ
所道理半ばなきにあらず。中
にもこの一門は、代々の朝敵を



重盛の諫言

人皆心あり云々
聖德太子憲法の第十條

平げて、四海の激浪を鎮むることは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條の御憲法に、人皆心あり。心各執あり。彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして端なし。爰を以て、たとひ人怒るといふとも、却て我が咎を恐れよ。とこそ見えて候へ。然れども、當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀反、既に顯はれさせ給ひ候ひぬ。その上、仰せ合せらるゝ成親卿を召し置かれぬる上は、たとひ君、いかなる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐れか候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈、奉公の忠勤をつくし、民のためには益、撫育の愛憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。

佛陀

(梵語)
Buddha
正覺と譯す

千顆萬顆の玉
一入再入の紅
日に登き風に登く、
高低千顆萬顆の玉、
枝を染め浪を染む、
表裏一入再入の紅なり
(和漢朗詠集)

神明、佛陀感應あらば、君も思召しなほすこと、などか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎わくかたなし。道理と僻事を並べんに、いかでか道理につかざるべき。これは尤も、君の御理にて候へば、かなはざらんまでも院中を守護し参らせ候ふべし。その故は、重盛、初め、叙爵より、今、大臣の大将に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも越え、その恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にも尙ほ過ぎたらん。然らば院中へ参り籠り候ふべし。その儀にて候はば、重盛が身に代り、命に代らんと契りたる侍ども少々候らん。これ等を召し具して、院の御所法住寺殿を守護し参らせ候はば、さすが以ての外の御大事にてこそ候はんずらめ。悲しきかな、君の御ために奉公の忠を致さんとすれば、迷廬

迷廬八萬の巔

蘇迷廬の略
須彌山ともいふ
高さ八萬四千由
旬あると、一由
旬は中華民國の
三十里即ち約十
八料

Sumeru

進退これ谷れり

(詩經)

富貴の家には……

この文は事文類聚に
あるといふ

八萬の巔いたゞきよりも尙ほ高き父の恩、忽に忘れんとす。痛ましきかな、不孝ふけうの罪を遁れんとすれば、君の御ためには、既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へがたし。申し受くる所詮は、只重盛が首を召され候へ。その故は院參いんさんの御供をも仕るべからず、又、院をも守護し參らすべからず。扱も富貴といひ、榮花といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には、祿位重疊せり。再び實なる木はその根必ず傷む。と見えて候ふ。心細うこそ候へ。何時までか命生きて、亂れん世をも見候ふべき。唯、末代に生しやうを受けて、かゝる憂き目にあひ候重盛が果報の程こそ拙なう候へ。唯今も侍一人に仰せつけられ、御壺の内へ引き出されて、重盛が頭の刎ねられんずることは、いと易い程の

御事ごじでこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。とて、直衣の袖も絞る許りにかき口説くちせき、さめんと泣き給へば、その座に並み居給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。入道、頼み切つたる内府はかやうに宣ふ。世にも力なげにて、いやいや、それまでの事は思ひもよりさうず。悪黨共の申す事に、君のつかせ給ひて、如何なる僻事などもや出でこんずらんと思ふ許りでこそ候へ。大臣、たとひ如何なる僻事出で來候へばとて、君をば何とかし參らせ給ふべき。とて、つい立つて中門に出で、侍共に宣ひけるは、唯今これにて申しつる事共をば、汝等はよく承らずや。今朝よりこれに候ひて、かやうの事共を申し鎮めんとは存じつれども、餘りにひた騒ぎに見えつる間、まづ歸りつるなり。院參の御供に於ては、重盛が頭の刎ねられたらんを見て

平治物語の發端
竊に惟みれば、三皇
五帝の國を治め、四
岳八元の民を撫づる
皆これ器を見て官に
任じ、身を顧みて祿
を受くる故なり

光頼卿

藤原顯頼の子

承安四年(八三四)歿

年五十一

十九日

第七十八代二條天皇

の平治元年(八九年)

十二月十九日

平治の亂の時

信頼卿

光頼の甥

平治の亂に敗れ清盛

に斬らる

年二十七

系圖

顯頼 光頼
惟方

女忠隆妻

信頼

信俊 顯長 長方 時長

仕れ。とて、小松殿へぞ歸られける。(平家物語卷二)

一一 光頼卿の參内

さる程に、内裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸
修寺左衛門督光頼卿、此の程は、信頼卿の振舞過分なり。とて、不參
にておはしましけるが、參内して承らん。とて、殊にあざやかに束
帶引繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂
右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色の裝束に出で立たせ、自然の事
もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取
れ。とて、御身近く置き、其の外清げなる雑色四五人召具して、大軍
陣を張りて、處々門々を固く守護しけるを事ともせず、前高らか
に追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓をひらめ矢

をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後を経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、其の
座の上薦たち、みな下にぞ着かれたる。光頼卿、こは不思議の事
かな。人は如何に振舞ふとも、彼は右衛門督、我は左衛門督なれ
ば、下には着くまじきものを。と思はれければ、左大辨宰相長方卿、
末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそよにしど
けなう見え候へ。と色代して、しづくくと歩み、信頼卿の上にむず
と着き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には、母方の叔父なる上、大力
の剛の人なれば、特に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸
けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿、あなあさ
まし。と見給ふに、光頼卿、下襲の後引きなほし、衣紋つくろひ、笏取
り直し、氣色して、今日は衛府督が一座すと見えて候。『召しに參

紫宸殿

京都舊皇居の正殿の

名

古は朝廷の大禮の行

はれた所、また南殿

もといふ

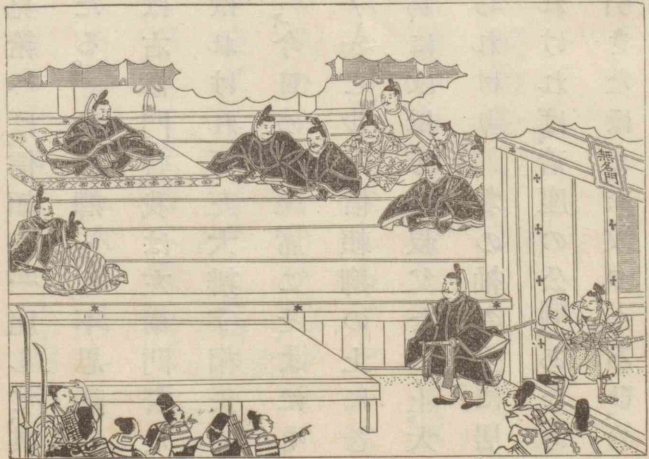
宰相

古は參議の別名

笏



ぜざらん者をば死罪に行はるべし。とやらん承りて参内すると
 ころなり。そもく何事の御詫
 ぞ。と問ひけれども、信賴卿物も宣
 はず、着座の公卿も一言の返答な
 かりければ、まして僉議の沙汰も
 なし。程経て、光賴卿つい立ちて、
 「悪しう参つて候ひけり」とて、しづ
 しづと歩み出でられけり。
 庭上に充ち満ちたる兵どもこれ
 を見奉つて、あはれ、此の殿は大剛
 の人かな。去んぬる十日より多
 くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人、一人も



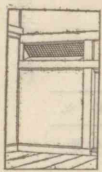
光 賴 卿 の 参 内

頼光

源満仲の子
 四融・華山・一條・三
 條・後一條の五朝に
 歴事し、國守を経て
 東宮大進となつた
 治安元年(六六)卒
 頼信

源満仲の子
 頼光の弟
 一條・三條・後一條・
 後朱雀の四朝に仕へ
 鎮守府將軍を経て美
 濃守となつた
 永承三年(七八)卒
 年八十一

壁に耳、天に口
 壁に耳あり障子に目
 あり(俚諺)
 詩經に「君子易く言
 に由る無かれ耳垣に
 屬す」と



おはしまさざりつるに、仕出したることよ。門を入り給ふより、
 いさゝかも臆したる體も見え給はず。あはれ、此の人を大將と
 して合戦せば、如何ばかりか頼もしからんと申せば、傍なるもの
 の、昔、頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき。其の頼光を打返
 して光賴と名乗り給へば、これも剛にましますぞかし。といへば、
 又傍より、など、其の頼信を打返して信賴と付き給ふ右衛門督殿
 は、あれほど臆病におはしますぞ。といへば、壁に耳、天に口といふ
 事あり。怖し、怖し、聞かじ。といひながら、皆忍び笑に笑ひけり。
 光賴卿、かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小
 菴の前、見参の板たからかに踏鳴らして立たれたりけるが、荒海
 の障子の北、菵の戸の邊に弟の別當惟方のおはしけるを招き寄
 せ、宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間、参じたれども、承り定

見參の板



荒海の障子



別當

檢非違使別當
 少納言入道
 藤原通憲入道信西
 神樂が岡
 今の京都市左京區吉田山
 勸修寺内大臣
 藤原高藤
 三條右大臣
 高藤の子

めたる事もなし。まことやらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、其の人みな當時の有職、然るべき人どもなり。其の内に入らんこと、甚だ面目なるべし。さても、先日、右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に神樂が岡へ向はれけることは如何に。以ての外、しかるべからざる振舞かな。近衛大將、檢非違使別當は他に異なる重職なり。其の職にゐながら、人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず、と宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかば、とて赤面せられけり。光頼卿重ねて、こは如何に勅諭なればとて、如何で存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖、勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代。承り行ふ

延喜

第六十代醍醐天皇の
 時の年號

君既に十九代

醍醐天皇から二條天
 皇まで十九代

英雄

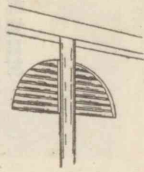
英雄家
 公卿の家の名
 清華ともいふ

切目の宿

和歌山縣紀伊國日高
 郡切目村

ことは、皆これ徳政なり。一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴つて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝほどのこととはなかりしに、御邊はじめて暴悪の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉紀伊の國、伊賀伊勢の家人等、待受けて、大勢にてあなる。信頼卿がかたらふ所の兵、若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若しまた、火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎きなるべし。如何に況んや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、この時にあるべし。右衛門督は、御邊に大小事を申し合すると

主上
第七十八代二條天皇
上皇
後白河上皇
櫛形



こそ聞ゆれ。相構へてく隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて、主上はいづくにおはしますぞ。「黒戸の御所に。」上皇は。「一本御書所に。」内侍所は。「温明殿に。」
「劍璽はいづくに。」夜のおとゞに。と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當斯くぞ答へられける。「又朝餉あさかじの方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、それには右衛門督住み給へば、其の方さまの女房などぞ影ろひ候らん。と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今ほ斯くござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し参らせたり。末代なれども、流石に日月は未だ地に墮ち給はぬものを、天照大神正八幡宮は、王法をいかゞ守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、我が朝には未だ斯くの如き先蹤を

許由
前課の頭註を見よ

聞かず。前代未聞の不思議かな。とて、のろくしげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、且つは悲しくて、我如何なる宿業しゆくごうによつて斯かる世にうまれあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。とて、上の衣きぬの袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、うち萎れてぞ出て給ひける。(平治物語卷二)

一二 今様と朗詠

一 今 様

蓬萊山

蓬萊山

中華民国古代の傳説に東海の中にあるといふ神山。仙人がここに住むといふ

蓬萊山には千歳ふる、 萬歳千秋かさなれり。
松の枝には鶴巢くひ、 巖のそばには龜遊ぶ。

舊き都

舊き都を來て見れば、 浅茅が原とぞ荒れにける。
月の光はくまなくて、 秋かぜのみぞ身にはしむ。

をさまりなびく

をさまりなびく時なれや、 一天四海の内のみか
人の國まで日の本の いろこしが原も此のところ。

二朗詠

春

東岸西岸の柳、遅速同じからず。
南枝北枝の梅、開落已に異なり。

慶滋保胤

慶滋保胤

平安朝の文學者
出家して寂心といふ
長徳年中(六五―六六)
寂

源 英明

平安朝の文學者
天慶三年(二六〇)歿

夏

池冷しくしては水に三伏の夏なく、
松高くして風に一聲の秋あり。

源 英明

秋

林間に酒を煖めて紅葉を焼き、
石上に詩を題して綠苔を拂ふ。

白 居易

冬

寒流月を帯びて澄めること鏡の如く、
夕吹霜に和して利きこと刀に似たり。

白 居易

祝

長生殿の裏には春秋富めり。
不老門の前には日月遅し。(和漢朗詠集)

慶滋保胤

白居易

中唐の詩人
字は樂天
唐の會昌六年即ち我
が承和十三年(二五〇)
卒
年七十五

土佐日記の發端
男もすなる日記といふものを、女もして見んとするなり。その年の十二月二十日あまり一日の日の戌の時、かどです。そのよしいさゝか物に書きつく

紀貫之
平安朝初期の歌人勅を奉じて古今和歌集を撰す
天慶九年(八六六)歿年六十五
九日
承平五年(五五五)正月九日
第六十一代朱雀天皇の御代
大湊
高知縣土佐國長岡郡
那波
同安藝郡
今は奈半利町といふ

一三 土佐日記

紀貫之

九日、つとめて、大湊より那波の泊をおはんとて漕ぎ出でけり。これかれ、互に國の境のうちはとて、見送りに來る人あまたが中に、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等なん、御館より出で給ひし日より、こゝかしこに追ひ來る。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎ離れて往く。これを見送らむとてぞ、この人どもは追ひ來ける。かくて漕ぎ行くまに、海の邊に留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えなくなりぬ。岸にも言ふことあるべし。舟にも思ふことあれど、かひなし。かゝれど、この歌を獨言にして止みぬ。おもひやる心は海を渡れども

ふみしなれば知らずやあるらん。

宇多の松原
高知縣土佐國香美郡手結崎邊の海岸であらうともいひ、或は赤岡町であるともいふ

斯くて宇多の松原を過ぎ行く。その松の數いくそばく、幾千年經たりと知らず。本毎に浪打寄せ、枝毎に鶴の飛びかふ、面白しと見るにたへずして、船人の詠める歌、

見渡せば松のうれごと

すむ鶴は

千代のどちとぞ

思ふべらなる。

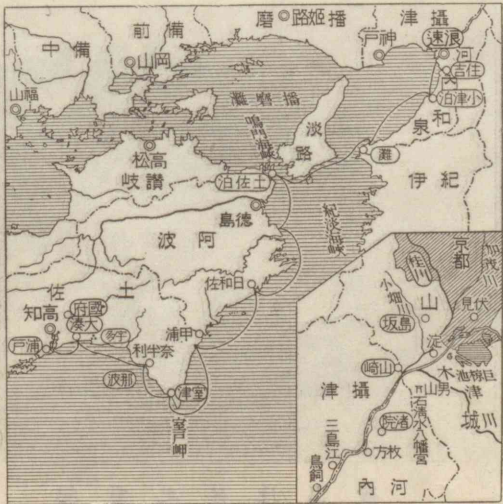
とや。此の歌は所を見るにえまさらず。



紀貫之之任地出發
佐藤靜湖筆

かくあるを見つゝ漕ぎ行くまに、山も海も皆暮れ、夜更けて、西東も見えずして、天氣のこと、櫂取の心に任せつ。男も習はぬはいと心細し。まして女は、船底に頭をつきあてて、音のみぞ泣く。かくおもへど、舟子も思へらず。そのうたふ歌、

春の野にてぞねをば泣く。
 吾が薄にて手をきるゝ
 摘んだる菜を親やまほる
 らん、姑やくふらん。 歸らや。 よんべの童もがな、錢乞はん。
 虚言をして除わざをして、錢ももて來ず、己だに來ず。



路舟のへ京りよ佐王

深崎
今の安藝郡室戸町

これならず多かれど、書かず。これらを人のわらふを聞き、海は荒るれど、心は少しなきぬ。かく行きくらして、泊にいたりて、おきな人ひとりたりため一人あるがなかに、心地あしみて、物ものし給はでひそまりぬ。

十六日、風浪止まねば、なほ室津にとまれり。唯、海に浪なくして、いつしか深崎といふ處渡らんとのみなん思ふを、風浪ともに止むべくもあらず。ある人のこの浪立つを見て詠める歌、

霜だにもおかぬ方ぞといふなれど
 浪のなかには雪ぞふりける。

さて舟に乗りし日より今日までに、二十日餘り五日になりけり。

十七日、曇れる雲なくなりて、曉月夜いと面白ければ、舟を出して

棹はうがつ波の上の月を……

棹は穿つ波の底の月を、舳は壓す水の中の天を(賈島)

漕ぎ行く。此の間に、雲の上も、海の底も、同じごとくになんありける。うべも昔の男は、

棹はうがつ波の上の月を、舟はおそふ海の中の天を。

とは言ひけん。又ある人の詠める、

みなそこの月の上より漕ぐ舟の

これを聞きて、ある人の又詠める、

かげ見れば波の底なるひさかたの

空こぎわたる我ぞわびしき。

かくいふ間に、夜漸く明け行くに、穢取等、黒き雲にはかに出で來ぬ。風も吹きぬべし。御舟返してん」と言ひて歸る。此の間に

雨降りぬ。いとわびし。(土佐日記)

一四 かぐや姫

〔竹取物語〕

竹取物語の發端

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬の事につかひけり。名をば讃岐造磨となんいひける

かぐや姫のよ

八月十五日ばかりの月に出でて、かぐや姫といたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て親どもも、「何事ぞ」と問ひさわぐ。かぐや姫泣くく「いふ、さきくも申さんと、思ひしかども、必ず心惑はし給はんものぞと思ひて、今まですぐし侍りつるなり。さのみやはとて、うち出ではべりぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを、昔の契りありけるによりてなん、この世界にはまうて來りける。今は歸るべきになりければ、この月の十五日に、かの本の國より迎へに人々まうて來んず。さらず罷りぬべければ、思し歎かんなが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。」といひて、いみ

じう泣く。翁、こはなでふことを宣ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさはせしを、わが丈たち並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へきこえん。まさに許さんや」といひて、我こそ死なめ」とて泣き罵ること、いと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、月の都の人にて、父母あり。片時の間とてかの國よりまうで來しかども、かくこの國には數多の年を経ぬるになんありける。かの國の父母のことも覺えず、こゝにはかく久しく遊びきこえてならひ奉れり。いみじからん心地もせず、悲しくのみなんある。されど己が心ならず罷りなんとする。といひて、もろともにいみじう泣く。使はるゝ人々も年比ならひて、立別れなんことを、心ばへなどあてやかに美しかりつることを見ならひて、こひしからんことの堪へ難く、湯水も飲まれず、同

じ心に歎かしがりけり。

このことを、帝みかど聞し召して、竹取が家に御使つかはさせ給ふ。かの十五日、司々に仰せて、勅使には少將高野大國たかの おほくにといふ人をさして、六衛のつかさ合せて二千人の人を、竹取が家につかはす。家にまかりて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合せて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓箭を帯して居り。母屋のうちには、女どもを番にすゑて守らす。姫塗籠ぬりかごの内にかぐや姫を抱かへ居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいはく、かばかり守るところに、天の人にもまけんや」といひて、屋の上に居る人々に曰く、つゆももの空にかけらば、ふと射殺し給へ。守る人々のいはく、かばかりして守るところに、蝙蝠かひばり一つだにあらば、まづ射殺して外とにさらさんと思ひは

六衛のつかさ

六衛府の役人
六衛は左衛門・右衛門・左兵衛・右兵衛・左近衛・右近衛

塗籠

家の内で、奥の方などにあつて、土で厚く塗り籠めた室。古くは寢室としたやうである

子の時
夜の十二時頃

五尺
一尺は約三十種

べる」といふ。翁これを聞きて、たのもしがり居り。これを聞き
てかぐや姫は、鎖し籠めて守り戦ふべきしたくみをしたりとも、
あの國の人をえ戦はぬなり。弓箭して射られじ。かく鎖し籠
めてありとも、かの國の人來ば、皆あきなんとす。相戦はんとす
とも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ。翁のいふ
やう、御迎へに來ん人をば、長き爪して眼をつかみつぶさん。さ
が髪をとりてかなぐり落さん。さが尻をかき出でて、こゝらの
おほやけ人に見せて恥見せん」と腹立ち居り。
かゝる程に、宵うち過ぎて子の時ばかりに、家のあたり晝のあか
さにも過ぎて光りたり。望月のあかさを十合はせたるばかり
にて、ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より、人雲に乗
りており來て、地より五尺許りあがりたる程に立ちつらねたり。



(筆夫忠村吉) 望月の夜

造磨
竹取の翁の名

これを見て、内外なる人の心ども、ものにおそはるゝやうにて、相戦はん心もなかりけり。辛うじて思ひ起して弓箭を取りたてんとすれども、手に力もなくなりて、なえ屈りたる中に、心さかしくも、念じて射んとすれども、外さまへ行きければ、あれも戦はで、心地たゞしれにしれて、まもり合へり。立てる人どもは、装束の清らなること、ものにも似ず。飛車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王と思しき人、家に「造磨まうで來」といふに、猛く思ひつる造磨も、ものに酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。いはく、汝をさなき人、聊かなる功德を翁つくりけるによりて、汝が助けにとて片時の程とて降ししを、そこの年比、そこの金賜ひて、身をかへたるが如くなりたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許にしばしおはしつるな

り。罪のかぎり果てぬれば、かく迎ふるを、翁は泣歎く、あたはぬことなり。はや返し奉れ」といふ。翁答へて申す、かぐや姫を養ひ奉ること、二十年あまりになりぬ。片時と宣ふに、怪しくなり



かぐや姫の昇天

はべりぬ。また、ことどころに、かぐや姫と申す人ぞおはしますらん」といふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしま

すまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛車を寄せて、いざ、かぐや姫、穢き所にいかでか久しくおはせん」といふ。立てこめたるところの戸、即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも人はなくしてあきぬ。○姫抱きてゐたるかぐや姫、外に出でぬ。えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣き居り。

竹取、心惑ひて泣伏せる所に寄りて、かぐや姫いふ、こゝにも心にもあらでかく罷るに、昇らんをだに見送り給へ」といへども、何しに悲しきに見送り奉らん。我をばいかにせよとて棄てては昇り給ふぞ。○具してゐておはせね」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。「文を書き置きて罷らん。こひしからんをりをり、取出でて見給へ。」とて、うち泣きて書くことばは、この國にうまれぬるとならば、歎かせ奉らぬほどまではべるべきを、はべらで過ぎわかれぬること、返すく、本意なくこそ覚えはべれ。脱ぎ置く衣を形見と見給へ。月の出でたらん夜は見おこせ給へ。見棄て奉りて罷る、空よりも落ちぬべき

心地す。

と書きおく。天人の中に、もたせたる筥あり。天の羽衣入れり。またあるは不死の薬入れり。ひとり、天人いふ、壺なる御薬奉れ。きたなき所のもの食し召したれば、御心地あしからんものぞ。とて、持てよりたれば、聊か嘗め給ひて、少し形見とて、脱ぎおく衣に包まんとすれば、ある天人包ませず、御衣を取出して着せんとす。その時にかぐや姫、しばし待て。といひて、衣着つる人は心ことになるなり。もの一言いひ置くべきことあり。といひて、文書く。天人おそしと心もとながり給ふ。かぐや姫、もの知らぬことな宣ひそ。とて、いみじく静かに、おほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。かく數多の人を賜ひてと、めさせ給へど、許さぬ迎へまうで

おほやけ
天皇

来て、とり率て罷りぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕へつかうまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得ず思し召しつらめども、心づよく承らずなりにしこと、なめげなるものに思し召し止められぬるなん、心にとまり侍りぬる。とて、

いまはとて天の羽衣きるをりぞ
君をあはれとおもひいでぬる。

とて、壺の薬添へて、頭中將を呼び寄せて奉らす。中將に天人とりて傳ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣うち着せ奉れば、翁をいとほし悲しと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、もの思ひもなくなりにければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。(竹取物語)

頭中將
藏人頭で近衛中將を兼ねてある人のこと

一五 萬葉集の歌

柿本人麿

歌人
持統・文武二朝に仕
へた

反歌
長秋の夕宿鴨
手易の白雲
照る月の
光も見えず
白雲
もい行きはばかり

吉野に幸ませる時
柿本人麿
安見ししわが大君、神ながら神さびせすと、吉野川たぎ
つ河内に、高殿を高知りまして、登り立ち國見をすれば、
たたなはる青垣山の山神の奉る御調と、春べは花かざ
し持ち、秋立てば黄葉かざせり、夕川の神も、大御食に
仕へまつると、上つ瀬に鵜川を立て、下つ瀬に小網さし
わたし、山川もよりて仕ふる神の御代かも。
山川もよりてつかふる神ながら
たぎつ河内に船出せすかも
(巻一)

山部赤人

歌人
柿本人麿と共に歌聖
と稱せられた

不盡山を望む歌

山部赤人

天地のわかれし時ゆ、神さびて高く貴き、駿河なる富士
の高嶺を、天の原
ふりさけ見れば、
わたる日の影もか
くろひ、照る月の
光も見えず、白雲
もい行きはばかり

扶桑珠寶所收本集抄一本頁

時じくぞ雪はふりける、語りつぎいひつぎ行かん、富士
の高嶺は。
反歌
西尾尾
天雲之外從見え、珠兒心毛身割
手易の白雲
照る月の
光も見えず
白雲
もい行きはばかり

山上憶良

萬葉時代の歌人
又漢學にも長ず
天平五年頃(七三三)歿

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ
ふじの高嶺に雪はふりける。(卷三)

子等を思ふ歌

山上憶良

瓜はめば子供思ほゆ。栗はめばまして偲ばゆ。何處より
來りしものぞ。眼間にもとなかかりて、やすいしなさぬ。

反歌

白金も黄金も玉もなにせんに

まされる寶子にしかめやも。(卷五)

讀人知らず

つぎねふ山背路を、人夫の馬より行くに、おの夫の徒歩

島木赤彦

歌人
本名、久保田俊彦
長野縣の人
大正十五年(二六六)
歿。年五十一

一六 民謡の話

島木赤彦

日本民族は太古から日常の感情を歌謡にうつして、自から口に
歌ひ、且つ又對者と唱和するといふ風があつた。それらの民謡
の中で、ある特別な形式を傳へたものは、移つて短歌となつて、彼
の萬葉集時代における大發達をなした。然るに、この萬葉集時

代に緊張の頂點にまで達した短歌が、古今集以後の勅撰集に至つて著しく弛緩の状態を現はしたといふことは、一面奇異な現象に考へられるが、それは決して奇異でないのである。古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生みだされた歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴族社會の遊び物であつて、その出來方も、緊張した感情から生みだされると言ふよりも、外形を整へるために苦心して作り出されたもので、内面の空疎と萎縮とは當時の歌人が想到せぬ所であつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずして、かへつて短歌の形を存して居ない當時の民謡にこそ存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生れた短歌の精神が、民族的歌謡の一分流であるところの民謡に合流して居るとい

民謡の起源
 民謡の特點
 民謡の地位
 民謡の歴史

ふことは、決して不自然ではない。

この事は、勅撰集時代の、その背後に存して居たと思はれる、神樂歌・催馬樂歌等の中に現はれてゐる民謡を検して見れば、容易に首肯することが出来るのである。

笹分ば袖こそ破れぬ、利根川の石は踏むとも、いざ河原より。
 しながとり猪名の湊に入る舟の、かぢよくまかせ舟かたぶ
 くな。若草の妹も乗りたり、我も乗りたり。

湊田に鶴八つ居り、取ろちなや。八つながら物思はず居り、
 取ろちなや。八つながら取ろちなや。

といふやうなのはほんの一例に過ぎぬが、この民謡から採つたと思はれる以上の神樂歌や、催馬樂歌をもつて、古今集以下の勅撰集に比しても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白で

猪名の湊

兵庫縣攝津國川邊郡を南流してゐる猪名川の河口のあたり即ち今の尼ヶ崎あたりの湊であらう

ある。そしてこの民謡の系統は、足利・徳川の各時代を経て、順次に發達推移して今日に及んで居るのである。それらの民謡の生命となつてゐるのは、何であらうか。それはやはり民衆の苦しい生活が、自然に産み出した處の惻々として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の唄ふ歌謡には、のん氣に似て、その底には重々しい調子が籠つて居るし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊のやるせない哀音が籠つてゐる。

千が崎沖まぢや見送りましょが、それから先きは神だのみ。

(伊豆大島)

の唄の如き必ずしも船唄とばかりはいへぬが、海中の孤島に頼りなく住む人々の心理が、神だのみの哀音となつて現はれてゐる純粹さを味ふべきである。

千が崎
乳ヶ崎とも書く
大島の西北端にある
岬

浅間
長野縣と群馬縣との
境にある火山の名
高さ二五四二米
浅間山附近



碓氷
長野縣と群馬縣との
境の峠
高さ八五六米
いま信越線が此處を
通つてゐる
中仙道
古の京都から近江・
美濃・信濃・上野の各
國、即ち今の滋賀・
岐阜・長野・群馬の
各縣を経て東京へ通
ずる街道

浅間の煙が北へと靡く、今宵泊らにや雨になる。

一誦して浅間の山裾から碓氷越を
して北國街道を往來する馬子の唄
であることが判るではないか。浅
間の裾野には追分の宿場があり、碓
氷峠の下には坂本の宿驛があつて、
何れも中仙道の旅人の一夜の泊り
場であつた。その宿引の女が旅
人をよびとめて、一宿をすゝめる心
がこの歌の心である。一夜の宿を
勧める歌謡を、勧めらるゝ旅人や馬
子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて慰めてゐる所が、哀れな



浅間山

漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤、追分の曠野である。見上げる空には何時も淺間の山の煙が靡いてゐる。煙は多く南へ靡く。風が北なれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、明日の日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる」は、この嶮坂を上下する脚絆草鞋の身には、決して戯れの問題ではないのである。

麥搗いて、夜麥搗いて、お手にまめが九つ。九つのまめを見れば、親里が戀しや。嫁して幾何ならず、家人の心も知りがたく、起臥にいと落ち着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しき身も、今は夜麥を搗く。夜麥を搗いて掌に出來たまめを眺めて、親里を思ふ心の痛切さは、恐ら



新開山荘
新開山荘
新開山荘

く人麿貫之の秀歌にもまさるものがあらう。

これらの唄は、その生活から歌はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が抒べられてゐる。そしてその民謡としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理感情を現はす民謡ほど、それがまた地方的な個性を表現してゐると言ひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少なくとも土の個性を離れることは出來ない。その土地の持つ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謡に、強い影を投げることは、誠に自然の現象である。「千が崎沖まで」の唄が島に生まれ、淺間の煙の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生まれ、麥搗いての唄が伊豆南方の田舎に生まれ、まれていることを考へ合せると、民謡と地方との關係を略推測

伊豆
静岡縣伊豆半島地方

することが出来よう。

只、民謡の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地訛りを加へて、何れの唄が何れの地に發生したかを見分け難いことも少なくない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れては行はれぬから、その轉訛に自から地方的個性が現はれて來る。例へば「麥搗いての歌は甲斐の南方では、

大麥ついて、麥ついて、お手にまみよ九つ。九つのまみよ見れば、親の在所戀しよ。

と唄うてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐることが味はれる。

この苗をとりあげて、何處に住まらずや。いなごや。きり芒、

甲斐
いま山梨縣に屬す

すき葦の、こやのうらに住まらずや。

これは伊豆の南方の稻生澤村の苗取唄である。おもふに、この歌謡は決して近代のものでは無い。少なくとも平安朝或はその以前にうまれたものが、その優れて秀でた調子を持つが爲に、南方の邊土に今日まで、轉訛しながらも生命を存したのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち満ちてゐる。この美しい心性を持つた民謡が、今日の日本に残つてゐて、現在農夫の口に歌はれてゐることは、民族の誇りとするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、蝗よ、お家はどうするのか。刈つた芒や、結び編んだ葦の小屋の中に、自分と共に住まないか」といふその心は、何といふ單純な、同情がこもつた、愛に満ちた心であらう。自然の中に愛に包まれて、その日の勞働をいそしみながらも、一匹

の蟲にも親しい心を持つ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。「この苗をとりあげて」は、原作は勿論、この稻を刈りあげて」であつて、それが苗取歌に轉用されたと思はれる。この唄は他の地方にも残つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆のものが、最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し、二の坂越し、三の坂越しや強清水。

これは、信濃國の民謡中出色の一である。「草刈馬に乗つて八が岳の裾野を上る。一の坂がある。二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たく滲みいるほどの強清水が湧いてゐる。」といふ意で、草刈の男女に唄はれることによつて、此の唄の趣が深い。そして、何處かに高山國らしい調子が現はれてゐる。暖地の濕潤

信濃國

今の長野縣

八が岳

長野縣と山梨縣との國境にある
高さ二八九九米

奈良朝

元明天皇より光仁天皇までの七代七十四年間（一三三〇—一四五〇）

古事記

元明天皇の和銅四年（七二二）、太安曆が神田阿禮の口傳によつて、神代より推古天皇までの歴史を記したものである。三卷

日本書紀

三十卷
舍人親王が元正天皇の勅命を奉じて撰せられ、神代から持統天皇までの歴史。六國史の一

に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖かいが、山國の明るさは寒い。それが、これらの民謡の中にも現はれてゐるのである。

一七 上代文學

奈良朝及びそれ以前は我が國文學の發生時代であり、搖籃時代である。其の内容及び形式に於て、時代の相に色づけられながらも、其の基調をなす傳統的國民性が、文學の上に基礎づけられたのは此の期である。神代は固より、文獻の無かつた時代のことは貌として知る由もないが、只、古事記・日本書紀・祝詞・萬葉等によつてこれを推測すれば略、其の輪廓を窺ふことが出来る。文學は必ず時代の反映をなすと共に、一步深く國民性の影をうつ

す。我が古代の國民性は色々に説明されようが、敬神尊祖・自然愛・現實謳歌・勇往邁進・清淨潔白等がこの特色であつたと言へる。そしてそれらが當時の文學の根本内容をなすのである。

抑、奈良朝以前を記述した文獻には、事實と傳説とを混合した古事記・日本書紀・風土

記・純文學の記紀の

歌・萬葉集・懷風藻と、

祭祀の時神前で唱

へる祝詞・天皇より

臣下に賜ふ宣命等がその全部であるが、其の中、古事記・祝詞・萬葉集は、大體純國風の主要な三方面、即ち古事記が建國の精神を、祝詞が敬神尊祖を、萬葉集が自然及び人情を顯はし、三種三様、各特

故於其天照太神見畏聞天石屋戸所別
許分理此三字也今高天原尊暗華原中國
悉聞自此而常夜往於是万神之聲者狹蠅
邪須此字滿万故志發是以八百神於天
子之河原神集而訓集云高休産集日神
之子思慮神念思訓全云而集常世長鳴鳥令

春瑜本古事記

質を有せる事に於て最も尊い所産である。蓋し我が國で初めて文字を使用した年代は不明であるが、先づ應神天皇の御代と見て差支へなく、續いて欽明天皇頃から佛教の渡來と共に漢字の使用が一層廣くなり、それによつて古來の口碑・傳説が初めて記録になつたのが古事記であり、間もなく日本書紀は更に漢文の體を具備して編纂されたものである。

奈良朝に入つては、先づ風土記の撰出があつた。これは文學とは直接の關係は無いが、文獻の少ない當時としては、矢張り文學資料になる。此の頃には既に漢唐・印度の思想が餘程浸入し、大化の改新を始め諸制度の方面は相當複雑化したとはいへ、感情方面には未だ大きな影響を蒙るまでには至らない。其の純國風を宛らに謠つたのが萬葉集である。これに前二者に比して

一層純眞なそして古色を帯びた祝詞とを併せ考へると、我が祖先の思想感情が前述の様であつた事が推測されるのである。以上は思想感情方面の大様であるが、漢字の使用は文献の出現を促すと共に、文字そのものをも研究發達させた。即ち遣隋使・遣唐使や、留學生又は佛教研究者の中には、已に音韻の研究も行はれ、一方、實用上の便宜から字形の改變があり、兩者相俟つて假名の發達となつた。かくて、記述に必要な文字は奈良朝の末までには、完成し、平安朝に入つて十分の力を發揮するの基礎をなしたのであつた。

漢文は漢字の使用以來、次第に發達し、日本書紀の撰述となつたが、紀真人淡海三船吉備眞備等の學者が輩出し、孝謙天皇の御代には、我が國人によつて創作された詩文を集めた懷風藻を見る

淡海三船
神武天皇から持統天皇までの御謚號を撰す

延暦四年(四四〇)卒
年六十四

吉備眞備

本姓は下道朝臣
年二十四で遣唐留學生となり、歸朝後累進して右大臣となる
寶龜六年(四四五)薨年八十三

までに進んだのである。

こゝに一言したいのは、傳説の價值についてである。例へば、古事記・日本書紀の内容は、古代より言ひ継ぎ語り傳へてゐた事柄であるから、永年の間には虚傳も混じり挿入削除も手傳つて、史實として信憑すべき限度は判然しない。常識から考へても荒唐無稽と思はれる箇所も少なくない。然し、凡そ傳説といふものは事實を根柢として成り立つもので、我が國に全く無關係な西洋諸國の事柄が我が古代の傳説となる筈がなく、我が傳説は我が國特有なもので、我が國特有の事實が周圍を掩うて居る。従つて、史實の據るべきものがない場合には、傳説によつて正しい推測を下すより外に道はなく、又それを正しく推測することによつて、或程度までそれに確實性を持たせることが出来る。此

の意味に於て、よしや記紀の或部分が傳説であるにしても、やはり我が國情を闡明する上に於て、それは尊い所産でなければならぬ。

かの天照大神を太陽に比せること、天の岩戸に隠れました時、諸の神達が御機嫌直しに奔走したこと、高天原といふ特種崇高な地域を傳へたこと等から、我が大和民族が古くより皇室を絶對的尊崇の的とした様子が想像され、大國主命が出雲の領地を献上せられたといふ傳説からは、何人も皇室の御意を遵奉する精神が看取され、素戔嗚命の大蛇退治からは、蠻民酋長の地方的割據の世態が知れる等は、其の數例である。一面、稚氣満々たる記紀の文面も、これを仔細に考察する時は實に綿々として盡きぬ清い國民的感情の泉が汲出せるのである。(新體國文學史要)

齊の宣王

中華民國戰國時代の

齊國の王

姓は田氏 名は辟疆

齊桓

齊の桓公

中華民國春秋時代の

五霸の一人

晉文

晉の文公

孟子

五霸の一人

名は軻

鄒の國の人

西紀前二八九年歿

年八十四

仲尼

孔子の字

西紀前四七九年歿

年七十三

胡斂

齊の臣の名

鐘に斂る

鐘を新に鑄た時、牲

を殺して血を薦めて

祭り、これを神靈な

物とする

一八 木に縁つて魚を求む

齊の宣王問うて曰く、齊桓、晉文の事、聞くことを得べきか。孟子對へて曰く、仲尼の徒は桓文の事を道ふものなし。こゝを以て後世傳ふるなし。臣、未だこれを聞かざるなり。止むなくんば則ち王か。曰く、徳、いかなれば則ち以て王たるべきか。曰く、民を保んじて而して王たらば、能く禦ぐなけん。曰く、寡人の若き者、以て民を保んずべきか。曰く、可なり。曰く、何に由つて吾の可なるを知るか。曰く、臣これを胡斂に聞けり。曰く、王、堂上に坐す。牛を牽いて堂下を過ぐるものあり。王これを見て曰く、牛、何くにか之く。對へて曰く、將にもつて鐘に斂らんとす。王曰く、これを舍け。

一八 木に縁つて魚を求む

吾其の穀觶として罪なくして、死地に就くが若くなるに忍びず。對へて曰く、然らば鐘に覺ることを廢せんか。曰く、何ぞ廢すべけん、羊を以てこれに易へよ」と。識らず諸ありや。曰く、これ有り。曰く、是の心、以て王たるに足る。百姓は皆、王を以て愛しむ



となす。臣は固より王の忍びざるを知るなり。子山王曰く、然り。誠に百姓小なりと雖も、吾何ぞ一牛を愛しまん。即ち其の穀觶として罪なくして死地に就くが若くなるに忍びず。故に羊を以てこれに易へしめしなり。曰く、王、百姓の王を以て愛しむと爲すを異しむなかれ。小を以て

孟野の忍びざるを知るなり。
子山王曰く、然り。誠に百姓小なりと雖も、吾何ぞ一

詩

詩經のこと
易經・書經・春秋・禮記と共に五經と云はれてゐる
他人心あり、予これを付度す
（詩經小雅巧言篇）
夫子
男子の尊稱
先生といふ程の義

大に易ふ、彼惡んぞこれを知らん。王若し其の罪なくして死地に就くを隠まば、則ち牛羊何ぞ擇ばん。王笑つて曰く、これ誠に何の心なりしぞや。我、其の財を愛しんで、而してこれに易ふるに羊を以てせしに非ざるなり。宜なるかな、百姓の我を愛しむと謂ふや。曰く、傷むなかれ。これ乃ち仁の術なり。牛を見て未だ羊を見ざるなり。君子の禽獸におけるや、其の生けるを見ては其の死を見るに忍びず、其の聲を聞きては其の肉を食ふに忍びず。是を以て君子は庖厨を遠ざくるなり。王説んで曰く、詩に曰く、他人、心あり、予これを付度す。と。夫子の謂ひなり。夫れ、我乃ちこれを行ひ、反つてこれを求むるに吾が心に得ず。夫子これを言うて、我が心に於て戚々焉たるものあり。此の心の王に合ふ所以の者は何ぞや。曰く、王に復すもの

ありて、吾が力は以て百鈞を擧ぐるに足るも、而も以て一羽を擧ぐるに足らず、明は以て秋毫の末を察するに足るも、而も輿薪を見ず。』と言はば、則ち王これを許さんか。曰く、否。孟子曰く、今、恩は以て禽獸に及ぶに足るも、而も功は百姓に至らざるは獨り何ぞや。然らば則ち一羽の擧らざるは、力を用ひざるが爲なり。輿薪の見えざるは、明を用ひざるが爲なり。百姓の保んぜざるは、恩を用ひざるが爲なり。故に、王の王たらざるは爲さざるなり、能はざるに非ざるなり。』

曰く、爲さざるものと能はざるものとの形、何を以てか異なる。曰く、泰山を挾んで以て北海を超えんとし、人に語りて曰く、『我れ能はず。』と、これ誠に能はざるなり。長者の爲に枝を折らんとし、人に語りて曰く、『我れ能はず。』と、これ爲さざるなり、能はざるに非ざるなり。故に、王の王たらざるは、これ泰山を挾んで北海を超ゆるの類にあらず。王の王たらざるは、これ枝を折るの類なり。吾が老を老として以て人の老に及ぼし、吾が幼を幼として以て人の幼に及ぼさば、天下は掌に運らすべし。詩に曰く、『寡妻に刑り、兄弟に至り、以て家邦を御む。』と。言は、この心を擧げて、これを彼に加ふるのみ。故に恩を推さば以て四海を保んずるに足り、恩を推さざれば以て妻子を保んずるなし。古への人の大いに人に過ぐる所以のものは他なし、善く其の爲す所を推すのみ。今、恩は以て禽獸に及ぶに足り、而して功は百姓に至らざるは獨り何ぞや。權して然る後に輕重を知り、度して然る後に長短を知る。物、皆然り。心を甚だしとなす。王、請ふ、これを度れ。抑、王、甲兵を興し、士臣を危くし、怨みを諸侯に構へ、然して後、心に快

泰山

中華民国山東省濟南縣にある古代より有名な山

北海

渤海のこと
泰山と共に齊の國に近いので譬に引いたのである

寡妻に刑り……
(詩經大雅思齊篇)

ざるなり。故に、王の王たらざるは、これ泰山を挾んで北海を超ゆるの類にあらず。王の王たらざるは、これ枝を折るの類なり。吾が老を老として以て人の老に及ぼし、吾が幼を幼として以て人の幼に及ぼさば、天下は掌に運らすべし。詩に曰く、『寡妻に刑り、兄弟に至り、以て家邦を御む。』と。言は、この心を擧げて、これを彼に加ふるのみ。故に恩を推さば以て四海を保んずるに足り、恩を推さざれば以て妻子を保んずるなし。古への人の大いに人に過ぐる所以のものは他なし、善く其の爲す所を推すのみ。今、恩は以て禽獸に及ぶに足り、而して功は百姓に至らざるは獨り何ぞや。權して然る後に輕重を知り、度して然る後に長短を知る。物、皆然り。心を甚だしとなす。王、請ふ、これを度れ。抑、王、甲兵を興し、士臣を危くし、怨みを諸侯に構へ、然して後、心に快

徳を以て天下を服す

秦・楚
秦は西方の國、楚は南方の國。當時は中國といはれた國の中の最も僻遠の地
中國
四夷に對して言ふ。中央部の文化の進んだ國と言ふ意味で、自尊的な稱である

きか。王曰く、否、吾何ぞこれを快しとせん。將に大いに欲する所を求めんとするなり。曰く、王の大いに欲する所聞くを得べきか。王笑つて言はず。曰く、肥甘、口に足らざるがためか。輕煖、體に足らざるか。抑、采色の目に視るに足らざるが爲か。聲音、耳に聽くに足らざるか。便嬖、前に使令するに足らざるか。王の諸臣皆以てこれを供するに足れり。而らば王豈にこれが爲ならんや。曰く、否。吾これが爲ならざるなり。曰く、然らば則ち王の大いに欲する所知るべきのみ。土地を辟き、秦、楚を朝せしめ、中國に莅んで而して四夷を撫せんと欲するなり。若の如く爲す所を以て、若の如く欲する所を求む。猶ほ、木に緣つて魚を求むるが如し。曰く、是の如くそれ甚だしきか。曰く、殆どこれより甚だしきもの

四夷
東夷・西戎・南蠻・北狄
四方の野蠻人

諸葛孔明

名は亮
孔明はその字
建興十二年（西紀三〇四年）歿
先帝
蜀の君主劉備
天下三分
當時の中華民國は蜀・吳・魏の三國に分れてゐた
益州
蜀の國の本名

あり。木に緣つて魚を求むるは、魚を得ずと雖も後の災なし。若の如く爲す所を以て、若の如く欲する所を求めば、心力を盡くしてこれを爲すも、後必ず災あらん。（孟子梁惠王章句上）

一九 出師の表

諸葛孔明

臣亮言す。先帝の創業、未だ半ばならず、中道にして崩殂す。今、天下三分して益州疲弊せり。これ誠に危急存亡の秋なり。然れども、侍衛の臣、内に懈らず、忠志の士、身を外に忘るゝものは、蓋し、先帝の殊遇を追うて、これを陛下に報いんと欲すればなり。誠に宜しく聖聽を開張し、以て先帝の遺徳を光にし、志士の氣を恢弘すべし。宜しく、妄りに自ら菲薄にして、喩を引き義を失ひ、以て忠諫の路を塞ぐべからざるなり。

宮中
朝廷
府中
軍部
侍中・侍郎
共に官名

宮中・府中は俱に一體と爲り、臧否を陟罰するに、宜しく異同あるべからず。若し奸を作し科を犯し、及び忠善を爲す者あらば、宜しく有司に付してその刑賞を論ぜしめ、以て陛下平明の治を昭



諸
晚
笑
堂
孔
明
畫
像

らかにすべし。宜しく偏私して内外法を異にせしむべからざるなり。侍中・侍郎の郭攸之、費禕、董允等は、これ皆良實にして、志慮忠純なり。是を以て先帝簡拔して以て陛下に遺したり。愚、思へらく、宮中の事は、事大小となく、悉く以てこれに諮り、然る後に施行せば、必ず能く闕漏を裨補して廣く益するところ有らん。

先漢
前漢とも西漢ともいふ
秦の次の王朝
西紀前二〇六年より
同一年まで
後漢
東漢ともいふ
先漢の次の王朝
先漢の續きである
西紀元年より二二〇
年まで
桓・靈
後漢の桓帝・靈帝
侍中・尙書・長史・
參軍
共に官名
南陽
郡の名
今の河南省南陽府

將軍向寵は、性行淑均にして、軍事に曉暢し、昔日に試用せられ、先帝これを稱して能ありと言へり。是を以て、衆議、寵を擧げて督となしぬ。愚、思へらく、營中の事は、事大小となく、悉く以てこれに諮らば、必ず能く行陣をして和睦せしめ、優劣所を得しめん。賢臣を親しみ、小人を遠ざけしは、これ先漢の興隆せし所以、小人を親しみ、賢臣を遠ざけしは、これ後漢の傾頽せし所以なり。先帝在しし時、毎に臣とこの事を論じて、未だ嘗て桓・靈に嘆息痛恨せずんばあらず。侍中・尙書・長史・參軍は、これ悉く貞亮にして節に死するの臣なり。陛下これを親しみ、これを信ぜば、則ち漢室の隆んらんこと、日を計へて待つべきなり。臣はもと布衣、躬ら南陽に耕して、苟も性命を亂世に全うし、聞達を諸侯に求めざりき。先帝、臣が卑鄙なるを以てせず、猥りに自

後傾覆に値ふ

後漢の獻帝の建安十三年に劉備は當陽の長坂に大敗した

任を敗軍の際に受

劉備は孔明を遣し孫權と好を結び、力を併せて曹操を赤壁に敗つた

命を危難の間に奉

孔明は呉に使し、救を求め、曹操を破つた

爾來二十有一年

建安十二年より建興五年即ち孔明が出師の表を奉つた年まで

臣に寄するに大事を以てす

劉備が死ぬ時、その子のことを孔明に託した

ら枉屈して、三たび臣を草廬の中に顧み、臣に諮るに當世の事を以てせり。これに由つて感激し、遂に先帝に許すに驅馳を以てしたり。後、傾覆に値ひ、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉じ、爾來二十有一年。先帝、臣が謹慎なるを知る。故に崩ずるに臨んで、臣に寄するに大事を以てしたり。命を受けしより以來、夙夜に憂慮し、付託の効あらずして、以て先帝の明を傷つけん事を恐れたり。故に、五月瀘を渡り、深く不毛に入りぬ。今、南方已に定まり、甲兵已に足る。當に三軍を獎率して、北の方、中原を定むべし。庶はくは、驚鈍を竭くし、奸凶を攘除し、以て漢室を興復して舊都に還さんことを。これ臣が、先帝に報じて陛下に忠なる所以の職分なり。損益を斟酌し、進んで忠言を盡くすに至りては、則ち攸之、裨、允の任なり。

瀘

瀘水、河の名

支那南方地方にあり

天子は六軍

諸侯は三軍

大軍の義

漢室 蜀は漢の一族である

舊都 洛陽

六合

小林一郎

文學者

中央大學教授

東京の人

明治九年(二五三)生

願はくは陛下、臣に託するに討賊、興復の効を以てせよ。効あらざんば、則ち臣が罪を治め、以て先帝の靈に告げよ。若し、徳を興すの言なくんば、則ち攸之、裨、允等の咎を責め、以てその慢を彰せ。陛下も亦、宜しく自ら謀りて以て、善道を諮諏し、雅言を察納して、深く先帝の遺詔を追ふべし。今、遠く離るゝに當り、表に臨みて、臣、恩を受けて感激に勝へず。今、遠く離るゝに當り、表に臨みて、涕泣して言はん所を知らず。(古文眞寶)

二〇 心の力

小林一郎

心の力一たび凝れば、向ふ所皆靡く。鬼に逢へば鬼を服し、魔にあへば魔を降す。彼の水の漲るや、よく千、奴の岡を浸す。たゞ

百里の原を焼く
燎原之火 (左氏傳)

六合

天地四方
全世界を言ふ

炎帝

夏の神

火龍

夏の酷暑

我が心は動かずして、高く怒濤の外に立つ。彼の火の熾なるや、よく百里の原を焼く。たゞ我が心は騒がずして、紅蓮の焰の中に笑ふ。猛虎の猛きも雲に駕し得ず、蛟龍の靈なるも地に潜み難し。たゞ我が心の向ふ所、敵する者無きが故に、能く雲を凌ぎて高く翔り、よく地を貫きて深く潜む。放てば六合に充ちぬべく、收むれば則ち密に藏る。彼の炎帝の火龍を鞭ち、極熱の氣天地を包めば、金石鎔け草樹燃え、江海共にあせ果てて、鳥は翼の力を失ひ、魚は盡く地に轉ぶ。たゞ我が心一たび凝りて、炎熱去れよと念ずれば、清涼の境忽ち開け、涼風萬斛身をめぐる。彼の互寒の天地を封じ、氷雪深く山河を鎖せば、日に熱なく月に影なく、黯然として物みな死す。血は氷りて環り流れず、肉は裂けて墮ちなんとす。たゞ我が心一たび凝りて、苦寒何ぞと叱咤すれば、

四體
兩手兩足
轉じて全身
體胖なり
富は屋を潤し徳は身を潤す、心廣く體胖なり、故に君子は必ず其の意を誠にす
(大學)

元氣四體の外に溢れて、陽春の候忽ち現ず。心虚なれば體危し、動けば勞し、行けば喘ぐ。心凝りて動ぜざれば、體胖にして氣飢ゑず。千里に行くも足軽く、萬鈞を荷ふも身は安し。悠々として立ち、怡々として坐す。貴きかな、我が心力。

限り無き心の力を知れ、果てなき心の靈を知れ。迷ひの作れる天地の外に、眞の天地のあるを見よ。我よく境を作る時は、絶えて境の爲に制せられず。神の關ける國に生まれ、神の後なる君に仕へ、世に雙びなき國の光に、我が踏む道は常に照らされ、貴き親の恩愛に我が住む庭は常に潤ふ。身に享け得たる幸ひを、あつく我が心に保ち、一向に我依らず、又一向に疎んぜず。悠々として立ち、怡々として居り、平かに思ひ、安らかに動けば、物は皆我

風を改め俗を移す
風を易へ俗を移すは
樂よりよきはなし

(孝經)

に親しくして、人は皆我が友たるべし。獨り在れば、我獨り樂しむ。共にあれば人と共に樂しむ。家に在れば家榮え、門をめぐりて鳥歌ふ。村に在れば村榮え、山にも岳にも惠風滿つ。進みて國事に參ずれば、克く百年の計を立て、退きて野に處る時は、風を改め俗を移す。榮々たりその胸宇、昂々たりその風貌。仰ぎて天に向ふときは、天の神遠く笑ひ、俯して地に視る時は、地の靈共にこれを讚ず。限りある生を享くれども、限りなき力を後にとゞむ。限られし地に身を置けど、限られぬ光を長へに放つ。誰かこの力を與へし、力の泉は我に在り。誰かこの光を與へし、求むれば我が心の光。嗚呼、天は高く、地は厚し、我に心の靈なるあり。三のもの永く相照らす。美はしきかな、偉いなる哉。

(こゝろの力)

阿部次郎

哲學者

東北帝國大學教授

山形縣の人

明治十八年(二五四)生

二一 生活の中心

阿部次郎

自分はすべての人に勧めるに、その生活の中心をこしらへることを以てしたい。その中心を中心として、日々の生活を調整することを以てしたい。もしその中心を發見することが容易でないならば、自分は生活の中心を求め、それを以て、それまでの生活の中心とすることを勧めたい。

諸子が學校にゐる間は、學校の課程が外部的ながら、諸子の生活に一種の中心を與へてゐる。諸子は諸子の生活を調整すべき具體的秩序を手近に持つてゐる。

隨つて、たとひ學校をつまらないものと見る人々でも、なほこれによつて、自分の生活に一種の具體的内容の與へられてゐるこ

とは、争ふことはできないであらう。併し、諸子が學校を卒業して授業時間や課題や練習や試験の束縛を脱れる時、諸子はまた一方に、何となく日々の生活に具體的内容を缺いて、退屈と空虚を覺えることを禁じ得ないであらう。學校に代つて諸子の生活の中心となるものが直ちには諸子の手に落ちて來ないであらう。多くの人は學校を卒業すると共に、何かをしなければならぬ義務を他人から負はされるか、もしくは自らの感情の中に負ふを常とする。併し、今日の社會は、我等の卒業を待受けてゐて、直ちに我等に適當な活動の地を與へるやうな社會ではない。さうして、自ら活動の地を造り出さうとするにも、我等は自己の内面に確かさの自信を缺き、我等の働きかけるべき社會に對する適當な知識を缺いてゐるが故に、内外兩様の意味に於て、どこ

から手をつけていゝかがわからなくなる。かくて焦燥と空虚と、この二つの相反したやうで相近似した感情は、手を携へて我等の生活に迫つて來る。さうして我等はあせればあせる程、益々生活の中心を失つた感じに捉はれなければならない。自分は學校を卒業すると、直ちにこの病に捕はれて、學校卒業後の二三年は、まるで何事も手につかなかつた。さうして、この状態を脱却するまでには、自分としては堪へ難い程の忍耐と節制を積まなければならないなかつた。故に、自分は卒業の諸子を送るに當つても、特にこの點に關する注意を請はなければならぬ。凡そ人生は短く、人生は長い。爲すべきものを持つてゐるものには、六七十年の歲月は須臾にして流れ去るであらう。しかし、何事にも倦んだ心を取つては、五十年の壽命も、長い退屈な旅と

思はれるに違ひないのである。さうしてこの短い生涯を空過しない爲にも、この長い一生を退屈せずに暮すためにも、我等には生活の中心が必要である。自分は、中心を缺いた生活の中にある充實と幸福を考へることが出来ない。そこで、我等の問題は更に一步を進めて、いかにして生活の中心を發見すべきかといふことに移る。この問題に對する解答もまた、固より容易ではないが、自分には、その具體的方法として一つの考案がある。

と言つても、それは、何も珍しいことではない。最も自分に適しさうな人を選んで、その人の内面的發展を精細に跡付け、その通つた道を自分も内面的に通つて見ることである。約言すれば、自らその「師」を擇んで、自己の鍛鍊をその師に託することである。

信濃の飯山

長野縣の郡邑

白隠和尚

黄檗宗の高僧
静岡縣駿河國の人
明和五年(一三三)寂
年八十四



白隠和尚
白隠 和代 隱人 尚大 鑑

師の奴隷とならずに、しかも師に信頼して、常に「師」に照らして、自己を發見する途を進めることである。

自分は自分達の受けて來た纏まりのない教育と、徒に漠然とした廣い知識とを思ふ毎に、古人の受けた鍛鍊と訓育を羨ましいと思ふ。自分は、この春、信濃の

飯山に行つて、白隠和尚修行の地なる正受庵を訪うた。庵は高社の山を望み、千曲川を望む小丘の上にあつて、杉の老樹の

生ひ繁つた幽邃な境にある。初め白隠が惠端和尚をこの庵に訪うた時、惠端は白隠を崖から蹴落したさうだ。白隠はそれにも懲りずに、惠端に師事したさうだ。さうして、或日、白隠が一つ

の悟りを得て、その坐禪の座から(彼は戸外の石上に坐して工夫を積んだといふことである)歸つて來る時に、惠端は縁の端に出て、遠くから手招きをしながら、白隱を歓迎したさうだ。自分はその話を聞いて、白隱と惠端との間が羨ましくてならなかつた。自分にも、自分を崖から蹴落してくれる師匠、縁側から自分を手招きしてくれる師匠がゐたら、どんなに幸福なことであらう。師弟とは、與へられるだけ與へ、受けられるだけ受けんとする、二個の獨立せる、しかも相互に深く信頼せる靈魂の關係である。弟子をその個性のままに一人の「人」とするところに、師の師たる所以があり、その稟性に隨つて、一個の獨立せる人格となるところに、弟子の最も多くその師に負ふ所以がある。「道」の傳統は何等かの意味における師弟の關係を経て、始めて内面的

に生きるのである。

もとより、師に就くことは、自分の生活内容を、その師の供給に仰ぐといふことではない。我等が愛し、憎み、努め、怒る心は、我等が我等自身の中に豫め持つてゐなければならぬところである。これらの愛憎や、喜悲は、我等の生活を刻々に新たな境涯に漂はしめ、往々にして、我等の生涯を困惑と、壅塞と、彷徨と、昏迷の境に導く。この窮境を拓き、この關門を透過する努力に於て、我等は始めて「師」の忠言を必要とするに至るのである。我等が師に就いて學ぶべきところは、問題の解き方である。途の切拓き方である。生活内容を流れ行かしむべき方向である。もし我等自身の中に、豫め生活内容を有することなく、一定の傾向を有することなく、解決を要する問題を有することがないならば、師に就く

ことは、全然無意味でなければならぬ。故に生活の中心を求め、るために、古人の著作を研究するといふ時、我等の生活の意味は、讀書にあるのではなくて、我等の内面的知覺を開拓して、これを正しい方向に導いて行くところにあることは、繰返すまでもないことである。書を讀むことは、自ら生きることを停止することを意味するならば、また他人の著作を研究することは、自ら省みる事を中斷することを意味するならば、我等は固よりいかなる場合にも、書を讀むことを、他人の思想を研究することを、生活の中心とすべきではない。こゝに讀書といひ、研究といひ、師に就くといふのは、自ら生き、自ら省みる爲の一つの途を意味するものであることは、明瞭に記憶して置く必要がある。我等が師に就いて學ぶことを要する第一義諦は、行住坐臥に師の言葉

を讀誦することではなくて、何よりも先づ、師と同一の勇氣を以て、人生に衝き當ることとでなければならぬ。自己の直接經驗を基礎として、人生の疑ひに觸れ、人生の疑ひを解く途を求めることとでなければならぬ。

自分は、今、最も自分に適し、さうな師を選んで、これを師とすべきことを言つた。しかし、こゝに「最も自分に適する」といふのは、現在の自分が最も愛好するもの、現在の自分が最も親しみ易いもの——換言すれば、現在の自分の程度を以ても、容易に接近し得べきものといふ意味ではないのである。此の如き「師」は、たゞ我等をあまやかすもの、現在における我等の偏局した發展を、更に一面的に偏局せしめるものに過ぎないであらう。我等の「師」は我等を叱り、我等を引上げ、我等を打碎き、我等を改造するに足る

ほど、複雑で偉大なものでなければならぬ。この意味に於て、我等に「無理」を強ひる力のないものは、我等の師に仰ぐに値せぬものである。(三太郎日記)

二二 春は 酣

葛原しげる

(—少女の前途をことほぎて—)

春！ 春！

春は 酣!!

希望の色と緑濃き

大野に 野路に

黄金を輝かし

紫染めてゆかしくも

花 咲きほこり

春、春、春は酣。

舞ふや 蝴蝶 春日を浴びて—

よろこび ほほゑみ

大地に みたすと、

天降り来て彩翅ひるがへす 天馳使か。

啼くや 空には 雲雀のなめらけき 歌声—

たのしみ さいはひ

みそらに みたすと、

高音にきほひては奏づる天つ乙女か。

葛原しげる
本名 齒
教育家
童謡詩人
広島縣の人
明治十九年(五四)生

野末に豊かにたなびく八重霞

里には里の春をこむると――

村には村の春をこむると――

霞の奥にはほがらかにのびやかに

鶏かひのこゑ、こゑのかぎりに。

稚子ちごの聲、こゑのかぎりに。

春！ 春！

春は 酣あま!!

春 酣なる野の中に 只ただ一ひとすぢ直ただき路みち

霞の奥に 紅くれないの花、まさかりの

圓き丘に登りゆく

直き直き、只一すぢ、直き路

忽たちち起おこる劫ふた風ふうか

天あまくらく、地ちもふるひ

目めもくらむ大花おほはな吹雪ふぶき。

眼まなこしひたる夢見心地ゆめみこころに、

かつ酔よへど かつ惱なやめど、

只ただましぐらに 只ただ一ひとすぢに

丘かみを越こゆれば 彼方あなにぞ、

常春とこばらの邦土くに 常春とこばらの宮殿みや。

ただよふは 現世にして 何の花の香

芳醇つくるなく

高鳴るは 現世にして 何の樂の音

嚙喰きはまりなし。

常春の邦土に みちたる力
常春の宮殿に みちたる生命

春！ 春！

春は 酣!!

天づたふ眞日のあゆみを今日もまた山に入るまで
全けく見し
(杉浦翠子)

二三 祖宗の宏謨

徳富蘇峰

徳富蘇峰
史學者
文學者
貴族院議員
名は猪一郎
熊本縣の人
文久三年(一八六三)生

記者
蘇峰自らを言ふ
一寸
約三種
五分はその半分

恭しく天皇陛下御踐祚の翌日、朝見式の勅語を捧讀するに、祖宗の宏謨に遵ひの一句あり。又、議會開院式の勅語にも、此の句あり。吾人は祖宗の宏謨が、如何に陛下の御心に掛りつゝあるかを、恐れながら忖度し奉らざるを得ず。而して私かに自ら顧みて、祖宗の宏謨とは何ぞやと、胸に手を當て、熟思精想するを禁ずる能はず。蓋し、これを解釋し得るは、我が陛下の臣民を統率し給ふ大本大綱を解釋し得る所以なればなり。記者、豈に敢て解釋を試みると謂はん哉。然も諺に一寸の蟲にも五分の魂あり、と言へり。姑く自ら領會したる梗概を擧ぐれば、祖宗の宏謨には二個の要素あり。第一は帝國の統治なり。

瑞穂國……
(日本書紀卷之二)

即ち、瑞穂國是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。實
祚之隆當與天壤無窮者矣。

の一節にて囊括す。我が帝國の萬世一系の皇統の下に統治せ
られ、宇内無比の國體として、特立する所以、實にこゝに存す。吾
人はこれを稱して皇室中心主義と云ふ。然もたゞ皇室を中心
として、大和民族が一孤島に蟄伏するは、決して祖宗の宏謨にあ
らず。蓋し皇室中心主義は、體なり。其の用に至りては、更に他
に存す。人はこれを稱して、日本中心主義と言ふ。これ世界に
對して然るなり。而して此の主義や、我が帝國の上代文學に、最
も高朗、昭著にこれを説明したり。

辭別……
(祈年祭の祝詞)

辭別。伊勢爾坐天照大神能大前爾白久。皇神能見霽志坐四

智識を世界に求め
大に皇基を振起す
べし
明治天皇五箇條の御
誓文の一

方國者。天能壁立極。國能退立限。青雲能靄極。白雲能墜
坐向伏限。青海原者棹柁不干。舟艦能至留極。大海原爾舟
滿都都氣氏。自陸往道者荷緒縛堅氏。磐根木根履佐久彌氏。
馬瓜至留限。長道無間久立都都氣氏。狹國者廣久。峻國者
平久。遠國者八十綱打挂氏。引寄如事。皇太御神能寄奉波。
荷前者。皇太御神能大前爾。如横山打積置氏。殘乎波平聞
看。又皇御孫命御世乎。手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉。
茂御世爾幸閉奉故。皇吾陸神漏伎神漏彌命登。宇事物頸根
衝拔氏。皇御孫命能宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久登宣。
今、夫れ「智識を世界に求め、大に皇基を振起す」と言ひ、開國進取と
言ひ、若しくは帝國主義と言ふ。然も皆此の祈年祭の文句の外
に出でず。此の如き崇高雄大莊嚴の文字、單に文學としてこれ

を見る、眞に萬古の心胸を開拓するの概あり。矧んや列聖の鴻業、祖宗の遺烈、悉く皆此の中に含蓄せらるゝに於てをや。吾人は帝國主義を、古の羅馬人に求むるに及ばず、現今の英獨人に倣ふを要せず。苟もこれを一讀せば、思ひ半ばに過ぎん。たゞ誤解なきを望む。皇室中心主義は、皇室を中心とする主義なり。皇室を中心とするが故に、人民を無視するにあらず。皇室を畏れながら宗家とし、これを仰ぎ、これを崇め、これを本體とし、大和民族悉くこれを簇擁し、皇室の隆昌と與に、民族の繁榮を期するが如く、日本中心主義も、日本を中心とするが故に、世界を無視するにあらず。凡そ世界のあらゆる長所善所、美所は、八十綱打ち掛けてこれを我に採用し、而して我が國光を白雲の垂る限り、青波の洗ふ極みまで、發揚せんとするに外ならず。苟も

他を夷狄視する
東夷・西戎・南蠻・北狄の語が作られてある

然らざらんか、日本中心主義は、是れ野郎自大主義なり。中華民國が自ら中華を以て居り、他を夷狄視するものと、何の擇ぶ所かある。

惟ふに、維新の大改革や、畢竟、内に皇室中心主義を宣明し、外に日本中心主義を實行するの端を啓きたるに過ぎず。我が陛下の御踐祚と同時に、屢、祖宗の宏謨なる文句を、御言明あらせ給ふは、蓋し陛下の自ら期し給ふのみならず、更に臣民に向つて陛下御統率の下に、嚮ふ所を知らしめ、由る處を示し給ふ聖慮たらざるなきを知らんや。記者は斯く付度し奉るを以て、敢て大いなる咎なきを信ぜずんばあらず。

皇室中心主義の歸着する所は、忠君なり。日本中心主義の歸着する所は、愛國なり。忠君愛國は、偶然に生ずるものにあらず、必

ず其の淵源なかるべからず。吾人はこれを一に祖宗の宏謨に
 溯りて求むるを以て、最も確實に、且つ根據ある斷定と認む。然
 も此の忠君や、日本帝國を一家とし、皇室を家長として然るなり。
 此の愛國や、世界を大觀し、日本をその原動力として然るなり。
 中心點として然るなり。
 (皇室と國民)

昭代女子國文卷十終

昭代女子國文卷十一

昭和八年八月二十三日印
 昭和八年八月二十六日發
 昭和九年二月二十四日修正再版印刷
 昭和九年二月二十七日修正再版發行



編者

東京市杉並區西田町一丁目七七三番地
金子彦二郎

發行者

東京市神田區神保町一丁目五番地
上原才一郎

發行所

光風館書店

東京市神田區神保町一丁目五番地
(電話) 神田三〇八七番
(振替口座) 東京三二七番

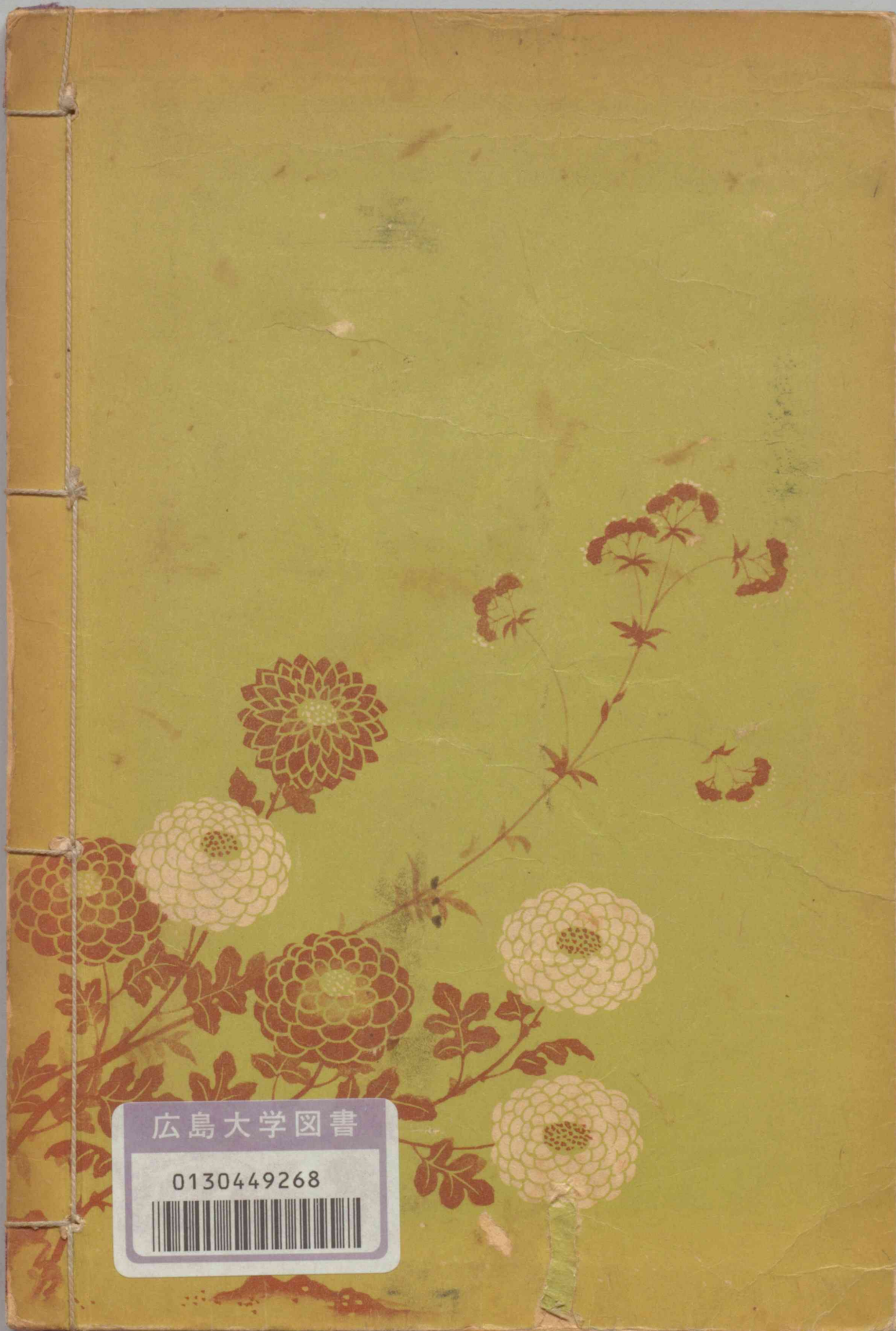
印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地
大日本印刷株式會社
根本力三

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
 賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候

文部省檢定
 高等女子學校國語教科用
 昭和九年三月五日

惠 祐 道 山



広島大学図書
0130449268
